

團七九郎兵衛
釣船三坂
一寸徳兵衛

夏祭浪花鑑

第一 色の水上波分けた 御鯛茶屋の鹽竈

序詞諸行無常と響きつゝ。菩提を知らずる遠寺の鐘。生者必滅四季轉變の花の色定なきは娑婆世界。爰に六孫王の御孫多田の満仲の御嫡子。攝津の守源の頼光とて。オロンへ智勇尊き。大将あり。地然るに如何なる御宿運にや。御心地例ならねば渡邊の綱。坂田公時卜部季武曰井定光。其外残る諸大名思ひくゝに相詰めて。御機嫌如何と窺ひ居る。詞中にも渡邊進み出で申すやう如何に方々。此度君の御病氣は御心の結ばはれと覺ゆるなり。地御慰を催して御心を晴しなば然るべしと述べければ。人々頭を傾けて。未だ詞も出さざるに。地公時やがて進み出で。

詞先づ某がな候は。夫人の心をいさむる事。酒宴に増したる時候はず。唐土の樂天が酒功讚を學び。御庭前に酒の泉を湛へ美女を揃へ。今様朗詠さまくゝに。音聲微妙を盡さん事如何あらんと申さる。地渡邊綱是を聞き。詞尤も面白くは候へどもそれは異國の諺なり。地近き我が朝の風景を申すべし。嵯峨の天皇の御宇かとよ融の大臣といひし人。思ひや空に陸奥の。千賀の鹽竈を堪へ忍び。六條河原の院や鹽竈を移し。難波の三津の浦よりも。潮を波ませ遊興有りしは。何とやらん妙なる様に存すれば。御庭前に鹽屋の體を飾り。美女を集め姫乙女に作り。汐波む體の遊景は如何あらんさりながら。兎角書付を以て言上然るべしと。や

がて一々相記させ。扱人々を召具して。フシナクリ御前をへさしてぞ出でらるゝ。ハルツシ御前になれば。地右の次第を言上有る。詞頼光御覽じ先づ以て某が病中を悲みて。精誠を盡さるの段。誠以て祝著せり。地いづれも宜しき事ながら。中にも此千賀の鹽竈の事は。吾盛の古陸奥へ下りし時。少しは見物申して有り。昔の體一入懐しく思ふ間。先づ鹽竈の風景望みなりと。御機嫌宜しく宜へは俄にハル三重用意と。地聞えける。フシ心も詞も。及ばれず。上下洒落たる遊びとて。フシさざめき渡る海景色。地目元に汐を波む海士は。千賀の鹽竈引きかへて。痴話のフシ鹽がま是や此。君が心を汲みて知る。賤が手葉のしをらしき。色と情の二人連舞なるかならぬか鳴尾崎。今日打解けて淡路嶋。通ふ乳守の廓にて。幾夜重ねん香田の端花の顔はせ吹付ける。それく。

こはい東風かぜのばつと吹井の。フシ浦
かとよ。フシ我名を問はば琴浦が。里に
ありしは昨日今日。興も一入増さるらん。
いざく沙を波むべし。サアなう沙を波
まうよう。たんぶ。くくと波み分けて
持つや田子の浦。東からけの汐衣。二月
の。雪と見なせば。フシ消えまじき壽。な
りと祝ひける。詞時に紀州熊野の別當愼
急しく參上し。百合オット待つて貰はう。
此扱も若王寺の。百合ハテサテ淨溜璃待つ
たてや。ヤイ茶平そりやどうぢやい。別
當の装束袈裟衣を忘れたか。昨日の役割
儼酔うて覚えぬな。玉嶋磯之丞は源の頼
光役。此大鳥佐賀右衛門は渡邊の綱。公
時は此御鯛茶屋の亭主。八百屋の末武久
三の定光琴浦すの汐波で。跡目論の淨溜
璃狂言。是まで鹽梅がよかつたに。頭取。
何と言ひ付けるぞいと。地叱られて公時
も。肩茶平何と狼狽へてぢや。衣裝著て

出なほした。いやくくく出なほし
所ぢやないわいの。頼親の調伏より大き
な事が出来て来た。ムウ来たとは何が。
来ましたくく。しかも歴々。ムウ又磯之
丞貴様の迎ひか。面倒な去なしてしま
れ。地いなせくと放埒の。腰押す悪事
の佐賀右衛門にさがなやふはと乗せられ
て。詞コリヤ去ねと言へく。去なすば
はやうばい去なせと。地酒がいはする我
儘八百。イヤく詞いつものとは違ひま
する。泉州濱田のお屋敷から。御傍輩の
介松主計様。堺のお鯛茶屋は是か。玉嶋
兵太夫殿子息。同苗磯之丞殿。明春是に
居申さる由承り使者に參つたと。乗物で
ぐわつたひし。ヤア何ぢや主計がわせら
れた。そりやママ何しにわせられた。エ
エひよんな所へわせれる和郎と。地驚く頼
光慌てる綱。肘取られし頼つきでも口は
利口にエ、コレ。詞磯之丞何をうろく。

主計がそれ程お身は怖いか。堅い自慢の
尤願意見に来たに違ひは有るまい。畏し
つたのぬらりくらり當分通れに間に合は
した。地身どもはそつと抜けて去ぬと
立上れば。詞ア、これ佐賀右氣の悪い。
貴様が執成言うてくれねば仕舞がつか
ぬ。イヤサつかうがつくまいが身どもは
主計に逢うては濟まぬと。地我が身勝手
の争合なかば。それもう爰へお通りなさ
る。跡目論取り置けと手々に衣裝著代
へるやら。譯も何やら知らねどもいひ交
したる夫の爲。疎な事ではあるまいとそ
ぞろ涙に汐波のコレ太夫さん。詞エ、こ
れく泣く所ぢやない。お前は奥へ禿衆
奥へ連れましてと。地氣を揉む身内の冷
汗に。紅粉の削けたる公時が顔は斑の飛
入樞。首が落ちはしよまいかと騒ぐ末武
八百屋物。荒田の見世へ出やせぬか。且
那樣申し聞えませぬやつぱり久三が役相

應米踏む臼井がましぢやのに。定光尻がくるであろと。口合くちあひやら泣事なみごとやら引かれ者の歌同前。夢中になるを踏みとばし。どうであらうとおりや去ぬると。雜儀を人に塗り付けて。去ぬる大島佐佐衛門おしゑフシ悪事あくごとと後に知られたり。地酒ぢしゆに亂れても武士は武士磯之丞いそは著る物著代へ。コリヤ亭主茶平。汝等なんぢらも皆勝手へ行けくく。主計に逢うた其上はどうした事が出来うも知れぬ。必ず騒ぐな出まいぞよ。地太夫ぢたふも必ず出やるなど覺悟かくご極めた詞の端はし。聞く氣遣きよひは有りながら早や次の間の足音に。短氣を出して下さんすと。心ならずも打連れてオトリ奥の。ハ一間に潜み居る。フシ次の間も。嘸驚おそきつ主計とは。長地女ながぢめの名にも付くなどそれにあらぬ打かけは町と屋敷を合せ帯。骨ほね牌結びの折目高。フシ下座しもざに著けば。地磯ぢいそ之丞しやう唯違ただちがひうたる使者しやせ設け。極姿ごくさに合點

行かず。詞そなたが介松主計殿な。介松氏とは懇意こんいにいたせば奥方も存じて居る。但し主計はいつ女になられた。何用有つての只今のお出で。地まづあれへお通りと慇懃いんぎんにあしらへば。詞主計様とはお目にかゝらうばつかりの作り名。お袋様からお使に。言ふなく。殿様お歸りなさるゝ故。お留守に行てゐる親兵太夫も屋敷へ戻らるゝによつて。戻らぬ先に俺おれに戻つて居よとの使か。戻られうがどうせうが去んでから又出にくい。去ぬまいと云ふからは。母はは者人が蜻蛉せうてい返り仕やらうが。親仁が目玉むかるゝたけはむきやつても去ぬ事ならぬ。勘當は御勝手次第しだいといんで言へ。又してもく戻れくと。役にも立たぬ使おこしやんな。遊びの邪魔じゃまに成ると言へ。何ぢや異類いれい異形いぎやうな者が来てあへさがす。地きりくいねと腹立聲はらたてこゑ。ア、詞お見忘れも御尤も。前か

どお屋敷に御奉公申しましたおかちと申す者。サアおかちであらうがおまけであらうが去ぬる事ならぬく。ならずばお歸りなされいでも大事だいじない。お使の御口上は殿様明日お歸りの筈なれど。大井川で三日の逗留。阿部川で又五日の川留。道中八日のお隙入りお歸りもそれほど延びる。お留守の内はお館やかたに御用もなし。お歸り迄はゆるりつとお遊びなされてござりませと。お袋様の粹まことなお使。誰が来てもお迎かと思召してお逢ひなされぬ。折から私もお願あつてお袋様へ参りまして。山今頭やまけがしのお使者の御用承つた私が作り。主計様と言うたりやこそ。お逢ひなさるゝ様にも成るホ、お嬉しう存じまする。御口上は此通りと。地思ひの外ほかに性悪しやうあくの。フシ腰押す母の御意はよし。地下地ぢかぢは好きなり。詞ムウ川留むうがわりゆうで戻りが遅い。それ迄はゆるりつと爰で遊べと言

はるゝか。そりやほんにか。アイアおれを産んだ和郎程有る。いかう粹になられたの。さうとは知らず鹿相申した。そんならばついちよつと。状おこされりや濟む事を。地あつたら肝を冷やさした茶平勘六来いゝゝ。おつと障子を引明けていそゝひよこゝ。阿オイデゝ。どうちや聞いたか。承りました氣疎い段か。お袋様は日本一の粹大明神。浦様も追付け。地見だい明神にお成りなさるゝ瑞相めでたしゝと。そゝり立つればコリヤおかち。阿汝への今日の褒美には人は見せぬ取つて置き。乳守の里から琴浦といふ根引の鬼灯。丸貌を拜まさう。太夫々々と地呼び立てられ。つい爰には居るけれど。行ても大事ないかへと。ッシ面はゆけに立出づれば。地おかちは會釋し手をつかへ。阿おまへが琴浦様かいの。若旦那のおいとしがり。ほんに御無理と

申されぬ。お目元なら口元なら。殊にあなたをいとしがつて下さります。ほんにお嬉しうござりますと。地やさしい詞の貌つくゝ。阿ほんに汝や前屋敷にゐたおかち。義平次とやらが娘ぢやな。さつきには腹の立つと氣の揉めたのでんと見忘れ。コレ太夫。あれも嫌ひでないぞいの。色事で屋敷を出たがマアどうして出入をハアお赦しはなけれども。お願あつてムウ成程知つたゝ。去年の寶の市に。中間と口論して牢舎した。アイアイ其團七殿事について。ヲ、サ氣遣すなく。喧嘩の相手の中間が。主の大鳥佐賀右衛門は俺が友達。たつた今迄爰に居た。主計と云ふ名で聞き怯ぢ逃けて去んだは。弱いやつ。おれが味よう言ひ聞かせ。佐賀右衛門が申しおろせばつい濟む事。追付け事なう濟してやろ。地そんならどうぞお世話しておかち様の氣休

め。佐賀様へ人やつてと女の事は女同士。名にも引くかた琴浦が裏なき詞に牽頭の茶平。阿サア。目出度い埒明いた。此悦びに今日の趣向。跡目論のさつきの残り。地見物にはおかち様始めうでは有るまいか。但しそれより飲にして大きな物で始めましょ。お鈍子早うと叩く手の。返事も長き春の日の。濱邊の磯な踏みあらし。地見るめけやけき非人の喧嘩。取りさへ人も友權禮。待てよ放せと聲かけ造りの下の躰は。こりや一興跡目論より乞食論。頼光ぢやない囉ひこう。様子を聞かうと縁先から。見をろす下にぶち叩き。阿ヤアこつばとめな。コリヤ八よ待て。イヤサ邪魔すなイヤサマ、待て。コリヤわれも仲間で口利者。譯も云はずにぶち擲き。どうした出入ぢや言うてからせい。ヲ、理窟がなうてせうか。コレ此奴めは此頃の新米。見れば骨も堅し。

仲間に入れて大事ないと思ひの外横道者。天下茶屋から廿町餘り。一文の錢唯有うとて追うて來た旦那衆の巾着。儂が切つてよう俺に難儀させたなア。大搦撲め。大盗人め。コリヤヤイ此堺街道は夜よなか銀持つて通らうが。指さす乞食ひつとりもない。儂が様なやつ生けて置きや。仲間者の足が上る。地其處退け彼奴打殺すと掴みかゝるをマ、待て。コリヤ新米よ。なまの八が云ふ通り。己りやちよこゝ腰な物ひぢるな。そんなら手よう盗人せい。但し盗まぬといふ言譯有らば。サアこつき出せまき出せと。地こつばの權にきめられて。頼も心もしよけくんと。頼こなた衆が皆尤も。盗まうと思つてした事ぢやない。帯の間から落ちかゝつてあつたを。ちよつと持つたらずるりと抜けたが。盗み始めの盗みをさめ。殺したか殺せ。をれが段々なり下

つた懺悔を聞いて下はりませと。地詫ぶれば上にはコリヤけうとい。したが非人の言譯とは。青江下坂ぢや有るまいか。旦那それから御覽じませと。幫間が悪口耳にもかけず。頼まあコレ二人ながら聞いて下はれ。わしが親は太物問屋。大名の掛屋もして。羽がひの下で人の百も養うた者。それ程に仕出した和郎ぢやよつて。何もかも始末しられたやら。四十過ぎての一人子。おれとは違つてよい衆付合させにやならぬと言つて。誦を習ふ舞を習ふ。鼓の茶の湯の何のかのと付合に錢の入る事ばつかり。伽羅かける外秤とやら手に取つた事もない。綿が高いの。錢が安いの手代共が寄合つて。勘定が合はぬの引くの山の。そんな事は空吹く風。嘘しても人參三昧。物心覺えるところに友達に誘はれて。此堺の乳守へ來初め。太夫が傍では恥かしうて爪銜へて居

た者が。二度になり。三度になり。四度めは面白し。五度めは可愛うなり。それから連も邪魔になり。十日も廿日も居続けのたわいなし。寄障る者皆追従。旦那くわつとに乗せ上げられ粹と言はるゝが嬉しさに。來ぬ日の紋日も買ふ様に成つて來ると。始には似ざりけり。のらめくゝと親父の意見絲瓜の皮とも思はゞこそ。親を親ともせぬ俺を母者人はまだ抱へて。陰へなり日南になり幾度か女夫喧嘩。其母者人へは義理はなく。得手勝手義理ぢやのしやばるの。それからは身請穿鑿。親方が高ばる。手代が困る此方はしこる親父は叱る。ひつ捉まへて二月ほど座敷半同然一寸も動かさず。物ほし

一七日立たぬ内彼の色を請出して女房に持つと。家の手代は見限つて引く様になつて来る。主が主なら家來も家來。新季の手代は引負する田舎の客も餘所へ行く。仕様事なしに商賣變へてママ請酒屋と出て見ればよその飲人は一人もなく。家内して飲上げる。當分いらぬ衣裝道具。質屋へ飛んで月の切れたも理の前。流れの者を女房に持つた因果。まだ奇特にもお眞向様は入殘の取賣で女夫暮す中。盜人に遭ひ火事に遭ひ。ぼんやしても猪口才でてらの錢皆はり込み。分散した糞の目で。死んだ親父が草葉の蔭から睨まれた。親の罰銀の罰身の程忘れた罰で。糞穢著る様になつたとは今では合點がいても跡の間。人の餘り喰ふ様になつて。くれぬ物つい取る氣になつたのは。榮耀榮華に戯へ過ごし。罰の當りたい程當つた骸。擲きなりと殺しなりと。存分にして

くれと。地命惜まぬ悔泣。歎り上げく。涙に亂が身の上は。二人が身にも外ならず。めんつに餘る涙泣實にも。フ乞食の涙なる。地こつばも涙押拭ひ。詞エイハ開きや素性もよい者なりなまよ。堪忍してやれ。ヲ、汝が言ふ事なりや赦してやる。重ねて盜ひろいだらばで打折るが合點か。中直りに醬油囉うてきすほ焼かう。板お造酒でも振舞へと。地腹の酒樽詰めかけるは。伊丹にあらぬ薦被り。フン打連れてこそ急ぎ行く。地始終を聞いて磯之丞。物をも言はず片隅の刀提け立上れば。詞申しおまへは何なさるとこへお出で遊ばすと。地梨浦に咎められ。詞イヤ何處へも行かぬ俺や去ぬる。去ぬとは旦那そりや何故に。どうぢや知らぬが俺や去にたい。おまへがお歸り遊ばすと今日私が使の口上。お袋様の御内意を無下になさるゝ同然。イヤサ無下にな

らうが如何せうが。今の新米乞食が言分。俺が身持に違ひない。胸にひつしと應へて来て。爰にはどうも居られぬく。内の首尾見て又來う太夫。アイナそれもお袋様のお心休めぢや近しいに又お出で。松屋の門迄送つてたも。おからは別に居れよと。地居浸れ客に去神の悪いは其處に堪られず。サアお歸りに。漸と。息の出でたるたいこ持。爰は一番さつぱりとサハリなう峠の孫ぢやくしときたわいな。咬るたいが拍子には。あはぬ玉嶋磯之丞フン送りしが小戻りして縁先に。手も跡を見送りしが小戻りして縁先に。手を五つ六つ打鳴らせば。ざわくくくとフシ立戻り。地濱邊に蹲ふ以前の乞食。詞お家様お首尾は好ござりましたか。首尾は好いともく。其方達が身の上咄で。唐の孔子の意見よりあなたお一人御合點いて。館へお歸りなされたはいかい働。

お袋様のお悦びおちが今日の身の面
目。地禮をいはいと勝手より取寄せ置
きし挾箱。蓋押明けて夫々にちはる布子
の裾尺も。荒男には大島と目利手利の仕
立際。手々に戴き戴いて。コリヤお金
まで下さります。お袋様から當座の御
褒美。お有難うござります。さらば。
地／＼の悦びは。おめでたい茶屋戎鳴お
かちは。屋敷へ。三重へ急ぎ行く

第二

殿の説意を呑込んだ。
おやま輪の拜領物

地治まる御代は國民にハハッシ惠も深き。
和泉の國。地濱田の御城主東より御歸國
と。上下賑ふ家中町。フシ表美々しき一
構。地お國語の諸子頭玉嶋兵太夫。今日
御上使の御入と中間小者が掃き掃除。庭
の盛砂簾目に武家のフシ行儀を顯はせり。
阿なんと角内。お屋敷は此様にお客設で
混ぜ返すに。若旦那儀之乗様は乳守の傾

城に腰打抜かし。一昨日からづつと出ら
れた。さればいの。今朝から七度半の呼
使でもお歸らない。あのお身持が親旦那
の耳へ入らば。久離が物はぶらつく。仕
舞はあなたの身の上を。歌祭文でやりを
ろと。地さがなき下口の端に。かゝる
折節儀之丞三日酔を乗物に。插られく
て戎鳴お鯛茶屋より立歸れば。おかちも
後より思念と走り付き。コレお乗物すぐ
にフシすぐにと昇き入れさせ。地音なふ
間もなく奥方は稚子の手を引きて。疾し
や遅しと一間を出て。阿ヲ、おかち戻り
やつたか大儀々々。奥様にも胸白者で嘸
おやかましう思召そ。イヤなう其方の育
ちが良さに年よりはおとなしい。此様な
子を持つは親の大きな氣助り。それにつ
き。今奥で儀之丞が顔を見て。嬉しい中
にも腹が立つ。是迄の放埒は若い者の有
る習ひと。父御の手前は憤みしが。今日

は殿様より仰せ渡さるゝ子細有つて。俄
に御家老介松主計様の御出。此御用には
づれては再び屋敷へ歸る事も叶はず。地
品によらば夫にも如何なるお咎が有らう
も知れず。其愛目を見る悲しさに。心一つ
で兎や角と案じ暮し。親子の縁も今日限
りかと。其方がヌエテ便を聞く迄は。なん
ぼう胸をフシ痛めしぞや。阿ア、それは
お道理。嘸お待兼ねされうと私も心急い
たれど。何が御遊興の最中なればほつか
りとも行かれず。御家老主計様のお名を
借つて。どうやらかうやら若旦那のお目
にかゝつたれば。お聞き遊ばせかちでは
ないかと。それはくお目角強く。迎に
来たか意見に來たか。アイと申上けたら
ば。歸らぬお心推量して。お歸りのかの
字も言はず。違合からの御意見がお耳に
とまり。早速お歸り遊ばした。ヲ、夫は
出かしかつた。儀之丞が此家を相續する

も。偏に其方が働返すくも忘れはせし。
ア、勿體ない事御意遊ばせ。扱私がお使
の役目も是迄。お借り申した此お小袖。

地奥様御免遊ばせと楯上著脱ぎ置けば。
下は晴著の木綿物疊さはりもしとやか
に。親子諸共座を押しさがり手をつかへ。

阿憚りながら奥様に。お願ひ申上げたき
は夫の身の上。今さら改め申すには及ば
ねども。私がお家に御奉公の中。お屋敷
へお出入の堺の魚賣。團七殿と不義致し
たる誤にて直にお暇下され。それより堺
の南の店で夫婦共持の魚商賣。何とぞ御
恩のお主様へお詫申しに。今日よ明日よ
と思ふ中に此子は出来る。世帯の世話に
絡まれ思はず御無沙汰。所に此度夫團七
の難儀定めてお聞及び遊ばさう。去年の
九月十三日賣の市の歸るさに。此御家中
のお草履取と乳守の中で口論仕出し。相
手は主人をかうにきて酒機嫌の刃物三

昧。何が夫もきかぬ氣なれば。先の相手
に手を負せ歸りしを。喧嘩兩成敗と有つ
て。相手も俱に牢舎仰付けられ。事の濟
む迄大阪の長町。三河屋の義平次と申す
私が親元へ。此子を連れ歸つて居ても。

主の難儀を思ひやつては有るにもあられ
ず。泣いて計りをりませしが。地殿様御
入國のお悦びに。數多の科人を御赦さる
ると。聞くや否や此子を連れて出牢のお
願ひ。何卒此度のお目出度に。夫團七の

科を御赦免有る様に。旦那様や奥様のお
取りなしなされ下さらば。此上もなき御
慈悲と涙と俱に頼むにぞ。阿ヲ、夫な
らば道理々々。今も言ふ通り。今日は御
家老主計様も御出なれば願うでもない幸
ひ。親子連れでお願ひ申しや。夫兵太夫
殿へは自がお話し申す。地上使のお出に
間も有るまい。其間勝手へ行て休息しや。
後にくくと入り給へば。かちもいそく

市松をオクリ連れてへ勝手へ入りにける。
ハルシ直きは武士の。常なれや。地和泉
の國の執權職介松主計。跡に續いて大島
佐賀右衛門。御用の長櫃家來に持たせ徐
徐と入り來れば。館の主玉嶋兵太夫同苗
磯之丞。其外組下の役人召連れ出迎ひ。

阿先づ以て今日は御兩所共に御苦勞。い
ざ先づあれへ。地然らば左様と上座に通
り。各席を改むれば。地主計諸士に打
向ひ。阿扱何れも仰せ渡さるゝ子細とい

つば。此度殿御入國の御悦びに。お國詰
の諸役人へ御土産を下さるゝ。目録に引
合せ頂戴有れ。地それくくと有れば佐賀
右衛門目録ひかへ。阿組頭玉嶋兵太夫
殿はへく。扱貴殿には御在京の間役儀
意なく勤められ。非番の折々は組下の
諸士を集め。武藝を専ら勵まれしと上聞
に達し。殿にも殊の外御満足遊ばされ。
長船の刀一腰御土産に下しおかれ。御折

紙に新地二百石の御加増。有難う思召されよと。地渡せば退つて頂戴し、コハ冥加もなき仕合。武士の面目此上なし。御前宜しく御推舉頼み奉ると。一禮ヲ述べて控ゆれば。詞組下駒形李兵衛殿。地ハツト答へて立出づる。詞承れば其方には。晝夜碁將棊の稽古に精魂を盡さるゝと。お上にも御沙汰あつて碁盤一面遣さる。尤も盤將は。軍の法に同じけれど云はゞ遊藝。武士は武藝を勵むが肝要。此後とても心得のあるべき事と。地詞の中手入れられて不首尾千萬將碁盤。碁盤かかへて李兵衛は隅に目を持ち控へる。同じく音羽浪之進。髪のかゝりも四座風に。歩むも三ツ地長地の間。のつし熨斗目の袖捌して畏る。詞其許には此間小鼓をよく鍛錬せられしとあつて。此度の御土産に小鼓一挺下し置かゝる有難いと頂戴あれ。惣別大名高家には。猿樂を召抱

へお慰になさるゝを。武士は打囃しせねば叶はぬと心得。武器馬具も代なし。小鼓に金銀を鏤めても。其鼓がまさかの時お馬の先の御用に立たず。遊藝に身を擲つは町人の業。重ねてきつと嗜み召されと。地やり込められて浪之進ちつともホウとも返答なく。生れ付いたる薄皮の。顔を赤めて猩々舞。フシまひくしてぞ入りにける。地跡へ出でたる大男年は四十七八手。名さへ羽根倉關右衛門。フシ相撲好とぞ知られける。詞御自分は先達上聞に達せし相撲好。戦場での組打に勝利を得るも相撲の手。武士の上では遊藝よりはるかに勝り。まさかの御用に立つべき業と。緞子三本化粧紙お心付いたる下され物。此主計も茹顏百ばい花に進上仕らんと。地家老職の戯言に。フシ時の興をぞ催しける。詞次は玉嶋礮之丞。委細は只今

産を賜はる。取分け其方は御親父兵太夫殿の役儀を大切にめさるゝ故。御懇情淺からず此一軸を下さるゝ。殿の御思慮を廻らされし掛物。有難う思ひ地拜見あれと差出せば。父のみならず拙者に迄重々深く御厚恩と。押戴きく。定めて殿のお物好なれば墨跡の類ならん。何にもせよ拜見とさらく。と押開けば。大和繪師西川が筆を揮うて畫いたる傾城の姿繪。こは如何に。フシく。と惘れ。果てたる計りなり。詞イヤサ驚かれな。聞けば其方當所乳守の傾城に身命を擲ち。晝夜を分かす通ひめさるゝ事。上聞に達し此掛繪を遣さる。覺なくは明白に言譯々々。ア、成程身に覺なき御不審を蒙れども。差當つて申譯致すべき様なければ誓言を仕らんと。コレく。儀殿。目前に誓言の罰が當らぬとて。此佐賀右衛門が聞く前で。ぬけくとした事云はれな。とは何故々々

とは白々しい。乳守の傾城琴浦を請出して。毎日々々歌舞伎狂言しらるゝを。誰知らぬ者がない。イヤそれは御自分も。ヲヲサ手前も此間住吉へ社參の時。戎嶋のお鯛茶屋で。傾城集めてどら打たるゝを黒い眼で慥かに見た。争ふ事なるまいと。地さす戀の意趣晴し汝が科を塗り隠せど。誤りある身は返答もせん方。スエテなうぞ見えにける。地父は始終黙然として居たりしが。ずんど立つて礮之丞を白洲へはつたと蹴落し。刀すらりと拔放し。振上ぐる手をしかと取り。詞兵太夫殿こりやどう召さるゝ。イヤサ不所存な悴。地眞二つにぶち放す。お退きなされと怒の面色。詞イヤくそれは了簡違ひ。お上にも様々と御賢慮を廻らされ。お慈悲を以て下し置かるゝ此掛物は。則ち殿の御折檻も同然。それに御自分が子息を手にかかれては。殿のお心が無足になる。

地とくと分別あられよと。主計の詞骨身にしみ。父もはつと頭を下け恭涙にくれるたる。詞ア、これく御親父御立腹は尤なれども。傾城の梅花の香鼻の先へ滲込んで。天から釣つた意見でもいつかないかぬ。此佐賀右衛門が申す通り微塵も違ひはあるまいと。地いへど上使は親と子の心を察し返答も。なくく父は白洲に飛びおり。礮之丞が襟掻い掴みぐつと引寄せ。詞只今身が手にかかる奴なれど。殿のお慈悲を以て命を助け勘當。武士でも杭でもない奴に。地刀脇差無用ぞと大小椀取り。詞ホ、ウよいざまく。傾城に魂を奪はるゝ根性から恥かしうも思ふまい。他人になつても兵太夫は。何れにも面目なうて此皺面を得上げぬ。汝が恥は身共が恥。今日賜つたる二百石の御加増を。汝が申請けたらば。親の身ではな何ほう嬉しかるべきぞ。不忠不孝の祿

盗人。地憎い奴めと齒をくひしめ。目には憎めど恩愛の。スエテ涙先立つばかりなり。地かくと聞くより奥方は一間の内を轉び出で。詞コレ礮之丞。心がらと言ひながら淺ましい形になりやつたの。此悲しい目を見まい爲。父御の手前は陰になり陽となり。母が意見を聞入れなく。勘當の身になつて今思ひ知りやつたか。地生れ落ちて今日の日まで憂いめ辛いめ知らぬ身で。京大坂へ行たとてもどこに一日半日のイみがなるべきぞ。不便の者やとばかりにて。人目も恥ぢずかつばと伏し身を開。えてぞ歎かるゝ。詞コリヤ女房。未練な縁言見苦しい。ヤイく家來共。彼奴門外より阿房拂ひ。情をかくれば同罪と。地厳しき詞におぢ恐れ。遠慮會釋も荒子どもに引つ立てられて礮之丞。先非を悔いても欺きても。再び返らぬ館の名殘親に名殘の惜まれて。見やれ

ば共に奥方も。見送りくゝのび上りわつと叫び入り給ふを。腰元婢介抱し伴ひ奥へ入りければ。母の歎も。父の怒も我が誤としをくゝ館を出でて行く。地取次の侍罷出で。詞最前より女一人稚き者を召連れ。御訴訟ありとて玄關に控へ候。通し申さんやと伺へば。地兵太夫打點頭き。詞先達より其願の事聞及ぶ。幸ひ御上使もお出なれば。地此方へ通せの聲につれ。フシかちは我が子の手を引いて。居馴れし屋敷も心から空恐ろしくおづくくと。白洲へ出づれば佐賀右衛門。詞願とあるは汝か。何事なるぞ早々申せ。恐れながら私は。堺南の棚に居ります。魚屋團七と申す者の女房子。此度のお悦ひに數多の科人を御赦さるゝと承り。親子が願の趣此一通に認め参りしが。女子の書いた物なれば釘の折れやら釣針やら。讀めぬ所はよい様に御覽なされて下

さりませと。地願の一通差出せば主計取上げ押開き。詞何れも御覽せ。是は去年乳守の中で口論仕出し。相手に手疵を負ふせしによつて雙方半舍言付けしを。出牢さしてくれとある妻子共の願書と。地聞きもあへず佐賀右衛門。詞其相手は身が草履取。ほてふりの分として。武士の家に手を負ふせたる暴れ者。科を赦し出牢させしてくれよとは。のぶとい奴等此願叶はぬくゝイヤくゝこれさう仰有るな。此兵太夫が存するには。先づ彼等が願ふ一通を聞いた上ハテ。赦さうが赦すまいが其時の評議。イヤサ評議も絲瓜も入り申さぬ。身が家來は手疵が重つて今朝牢死致したからは。其團七めを下手人。品によつて汝等親子共牢へぶち込み。縛首の相伴さする。地覺悟しをろと睨付くれば。はつとばかりに女房は。頼みも力も落ち果てゝせんかた涙にくれけれど。ま

だ稚き市松は。親の歎も白洲の小石ッ拾ひ集めて手悪戯。詞コリヤ市松今のを聞かぬか。先の相手が死んだによつて父様の首切るといひの。地お詫申しやくゝと押出せば手を合せ。詞コレ殿様。私を代りに牢へ入れて。父様の首切らずに休へて進せて下されと。地あどなき願に兵太夫。目をしたゞき居たりしが。詞御上使何と思召す。相手が手疵で相果てなば團七も極めて死罪。何にもせよ囚人を引出し。死骸の吟味遂けた上。彼等が願も決著致さん。成程々々ヤイゝ家來共。獄屋へ参つて二人の囚人連れ來れ。地早うくゝと追つ立てやり。コリヤくゝ女。詞最前より幼い者が親に代つて牢舍の願の訴状の表も其通り。囚人を引出し死骸吟味の其上。父親が科を赦し悻を牢舍さす事もありなん。願書相違はないか。地そちが所存も聞きたしと。念を押されて母の親。

詞憚りながらお聞きなされて下さりませ。團七殿が牢の中で。様々憂き目に逢はつしやる話のそしりはしりを聞き。五つや六つの子心にも悲しいやら。父親に代り牢へ入らうと。毎日々々此母を泣きわめいてせがみますれば。女子の愚癡な心から。あれが魂に神佛が入代つておつしやるかと。地それ故のお願なれど夫なり我が子なり。どちらをどうとも悲しいものは私一人。何卒夫が此度の科を御赦免下さらば。生々世々の御慈悲と。白洲にかつばとッ身を投伏し泣きわぶる。こそ不便なる。地佐賀右衛門せうら笑ひ。ハハ、ハ、テ御よい工面をやり居つた。子を持った者はどれ共にあの手にはまらにやならぬ。あれは豫て小倅にいひふくめた拵物。子供ごかしに親めが命助からうといふ事か。地エ、けち太い女め巧い事ほざきあがれと。やりこむれば兵太

夫。イヤ〜 詞それは一途の了簡。既にもつて淡の楊修孔融は。五歳六歳で才智勝れしと聞けば。いはんや日の本正直を本とする神の國。子供に孝行な者あるまじいとも言はれず。コリヤ〜 幼い者。地物とらせうと招き寄せ。かけ盤にうづ高く盛り上げし菓子取上げ。地身共がいふ事よつく聞け。父親の代りに其方が首を切らするか。この菓子が欲しいか望み次第と。地問へばそばから母親が。それ〜 市松父様に替りませうとお願ひ申しや。やいの〜 とあせりもがけば佐賀右衛門。詞ヤア女め云ひ教へるか。退れ〜 とねめつくる。地市松は會釋もなく。首切らるゝ事おりや厭ぢや。菓子がほしい殿様と手を差出せば。フウ詞牢へならば代つて入る氣。首切らるゝは厭ぢや迄。ヲ、よういうたな菓子とらせう。何と佐賀右殿アレ見られたか。親に代つて切ら

れうより。菓子欲しいと云うたのはいいふくめぬは證據。どうでも子供は正直なと。地落つる所を兩人が引上げ〜 云廻せば。佐賀右衛門はむしやくしや腹。ッシ頬ふくらしてゐたりける。地程なく牢屋の役人ども。見るもいぶせき牢死の囚人。春に指荷はせ肩肘怒らし引添うたり。後へ引出す繩付は日影見ぬ目の色青さめ。月代延びて顔付も。變り果たるッ有様に。アレ市松父様ぢや團七殿が懐かしや。常々に此方の短氣を意見しても聞入れなく。地今此様な憂き目を見る。此子は可愛うない事かと聲を上げかき口説き。涙ながらに駈寄るを。寄るなく〜 と役人ども突退け〜 白洲にどつかと引据ゆれば。佐賀右衛門縁より飛びおり。詞エ、汝憎いやつ。あの通り身が家來を切り殺したれば下手人は通れぬ。地見るも中々腹立やと。立蹴にどうと踏倒し。惡

者作あつなしやつ面おもてと。いうては蹴け飛ひし踏ふ飛ひし踏ふし。肩かた間ま肩かた骨ほね鐵てつ脚きゃくにて。ぐつくつと踏ふ付つくるを。見る女房にようばうの其その悲かなしさ我が身みも共に踏ふまるゝ心地こころ。短氣たんきの團だん七しちぐつとせき上あげ。繩なは取とひつ立たて立た上あるを役人やくにんども立ちかゝり引据ひきよれば。詞ことばヤア其その態たいになり上あつても此この佐賀右衛門さがゑもんに手向てむかふ氣きか。地ちしやらくさい婆ばふさぎと。すはと抜ぬいて刀やいばの背打せううち。ア、これく聊ちやう爾にあられなど駈かけ寄よつて止とむれば。詞ことばコレ兵太夫へいたふ殿だん科人かじんの肩持かたもちたるゝか。イヤサ拙者ちやくしやがお止とめ申ますも。いはゞ未いまだ落居らくぐせぬ科人かじん。萬ま一いつ貴殿きだんのお手てが廻まり。過あまり有あつてはお爲なりならぬ。いかに若いとてちと御鹿相ごしかさうに存ぞんずると。地ち理窟りくつに詰つめられ抜ぬいたる刀やいば。フシ手持て無沙汰むさたに見みえにけり。詞ことばコリヤく牢屋らうゐの役人やくにんども。死骸しかいをそれへ引出ひして御上使ごじやうしのお目めにかけよ。御苦勞ごくろうながら主計殿しゆけいだん。地ち成程なりほど々々一所いここに檢分けんぶん仕つから

んと兩人立た合あひ。詞ことばコレ見みられよ兵太夫へいたふ殿だん。此この疵きずは二十日にじゅうにちも以前いぜんに癒なえた金瘡きんそう。成程なりほど左様さやう。全く病死びやうじに極まつたれば。地ち團だん七しちに構かまひなしと言いはせも果はてず佐賀右衛門さがゑもん。詞ことば疵きずはともあれかくもあれ。人ひとをあやめた科人かじんを構かまひなしといはれては。國くにの政道せいだう立たつまいく。イヤそれはいはれぬ指圖さしず。今日けふ殿だんのお眼識めがしを以もて。役儀やくぎ動うむる此この主計しゆけい國くにの掟おきては背せかぬ。病死びやうじしたは彼奴かいつが不運ふえん。相手あひまの疵平癒きへんごなれば團七だんしちに科かはないと申ましたが誤あやりか。殊ことに以もてお身みの家來けらい。御法跡ごほふしの傾城かやうじやう町まちへ入い込み酒狂しゆきやうからの口論くちろん。道みちをいはゞ貴殿きだんが糺明ただしめしらるゝ咎とが。但ただし其方そのかたがかの色里いろりへお供ともに連つれられ。同じ穴あなの狐きつねと思おもひ非ひを理ことに枉かげて最さい辰しんの沙汰さたをせらるゝかと。地ち只ただ一口ひとくちに大おほ鳥とりも。いひこめられてしよけ鳥とりのまぢくとしてフシ閉口へいこうす。地ち兵太夫へいたふ女によに向むかひ。詞ことば幼わかい者が孝心かうしんを感じ入かり。汝等なんぢらが願ねがひ

通り。團七だんしちが科かを赦ゆるし明日あした當所あたところをお拂はらひ有難ありがたう存ぞんぜよと。地ち聞きくより親おや子は飛立ひたつ計はかりの。伏拜ふくはいみくく。嬉うれし涙なみだにけれれば。地ち何なにがな彼奴かいつに面ああてと。佐賀右衛門さがゑもんしやくり出でで。詞ことばエ、汝命おのいのち異加いかにな奴やつ。さりながら家財けざいを闕所あてして當地あたところをお拂はらひ。重ねて當所あたところへ入い込むと急度いそぐ曲事まがことに言付いける。それく役人やくにんども彼奴かいつ脚腰かつかうの立たたぬ程ほど國境くにがきより叩たた拂はらひ。イヤ先まづ待まちたれよ。彼かが科かとてさのみ掟おきてを背せいたといふでもなし。口論くちろんの事ことなれば家財けざい闕所あてには及およばまい。かういへばとて兵太夫へいたふが私わがの依怙よこならず殿だんの御慈悲ごひ。御政道ごせいだうの筋すぢを以もて科かを御赦免ごじやめんなさるゝ間ま。有難ありがたう存ぞんじ重ねて心こころを改あらめよ。身みが倅せがれ礮か之の丞しやう不所ふところ存故ぞんごに今日けふ日ひ勘當かんだう。定めの方かた々々を彷彿ふたふたひ歩き。果はは野末のすえか橋はしの下したのたれ死しをし居ゐらう。萬ま一大坂いちだで遇あつたりとも。身みが恩おんを受けたなんどし思おもひ。必かなずく情なさけをかくるな。ナ

ナ。合點か情をかくれば恨むるぞと。地口は立派にいひなせど。フシ心は頼む詞の色。地上使は見ぬ顔開かぬ顔。早お暇と座を立てば。詞最早お出なさるゝか先づ以て今日は御苦勞千萬。イヤサ貴殿にも子息の儀に就きお心遣ひ。イヤもう其儀は御沙汰なし。成程々々。地御内證へも宜しくお頼み存すると。挨拶すれば佐賀右衛門。ア、御亭主段々の御馳走忝い。お禮は重ねて急度申さう。地くくと歪む大鳥直なる主計。いはねどそれとらしい。警護割竹打立て立ちかゝり。引立つれば團七も屠所の羊に引代へて。命助かり廻り合ひ。親子の絆縛繩引かれ。出づるぞ三重へ悪ある

第三 出入の數なつまぐつた 珠數三昧の男作

地住吉のハハッ濱邊を春の。名に高き。そればかりでは並木の蔭。新家の寶寶髪

結床。櫛の齒をひく往来も自由な堺海道を。大坂の方からひよこくと来るは撥鬢槽毛の親仁。釣船の三ぶとては。人の脈がるぶら〜も。年が意見で直つたか。片手には珠數片手には。だつまの様な小ぢよつぽがオケリ冗談歩き持てあくむ。母のおかちが付添うて。フシ道々機嫌鳥居前。ア市ちつと爰で休みや。三ぶ様も休ましやんせ。ヲ、サテ此坊主はよう歩いたの。大方天下茶屋邊で儲かに駄々けうと思うて。廿五文が駕籠相興で振舞ふ所を。三文が地黃煎玉でまじなうた。昨日此方が戻つて。今日團七が牢から出ると聞いた故。嬉しうて夜が寐られず。夜の明けるを待ち兼ねた。コリヤ坊主。追つ付け父に逢はしてやらう。イヤしたがつと隙がいらう。祝うて明神様へお禮がてら。連れて参らしやれんかい。間違のない様におりや爰に待つて居よ。ほんに三ぶ様こちらの團七殿念頃な中ぢやとて。いかい世話でござんす。何のいのしたと言ふぢやないが此方の親父。三河屋の義平次が迎ひに来て遣りやる筈。今日は又なぜ來ぬの。今朝から腰が痛いと言うて。サア〜サア〜作病ぢやて。殊に直にも無い和郎ぢやもの。こんな事誰も來とむながる。マ参つてござれ。アイそんならさう致しませう。コレがながへ参つて來やんしよと地いやいのと。口うつしいふ鸚鵡の鳥。親子は宮へ三ぶは火打石に腰かけすつば〜。フシ茶の錢始末と見えにける。アハイ〜〜頼みませう。杖せんか。地ヲ大小路のあたりから持つて來て。息杖の先にぶらりと駕籠突張り。詞旦那申し。後の立場の駕籠と代へます錢やつて下はんせと。地願へば垂の内よりも。詞極めたは大坂迄着けてから先で渡さう。イヤサそれぢやちと

勝手がわるごんす。後の駕籠と代へねばならぬ。どうぢやあろと爰でやつて下さりませ。サアやる事は易けれど。錢を爰に持合せぬ。大坂で儲に渡す。ハア相棒聞いたか。勿怪なものをぢやな。イヤ受取らにや勝手が悪いが。大坂は何處へ着けるのぢやナ。長町邊で尋ねたらば。ムウ先は知れぬのでござりますか。イヤモそんないよ。爰で渡して下さりませ。ハテ執拗い爰には錢がないといふのに。ムウそんならおいらを銜るのかと地ッしがみかくれば。詞ア、コリヤ魚相いふな。武士に向つてヤどこへ武士。有様は丸腰エイそれで銜の手め上げた。こんな奴はヤアかうせいと。地思ひ合つたる悪者同士。駕籠をくると打返され。内より出たは磯之丞。落ちたるはずみに膝摺り剝き。くわつとせく氣も身の恥をハルッさしうつ。むいて袂へゐる。詞コリヤ棒組。

何でなと爰迄の駕籠代。算用して取つてしまへ。下著なりと上著なりと。地手繰つて算用済まさうと。ッ立ちかゝらんとする所を。詞コリヤ。減多な事して。後悔すなと。地横合から三ぶが聲。詞ヤ何も知らいでそこな親爺何いはるぞい。ホホ知つてゐる。コリヤいがむなやい。サア足元の明い中にとつ走らいで。なこな様若いがア温順しいよう堪忍さつしやるぞ。シテ駕籠代は何ぼの極め。直なしたは二百五十か。ても高い駕籠ぢやの。からしやつたこな様もこな様ぢやて。由縁かゝりはなければもコレ此親父がヲ尻持。ヤアわり様が尻持つか。ヲ此釣船の三ぶが尻持つた達引。此珠數で數へて見りや。丁度九百九十九出入ある。前なら汝壘んで仕舞ひ。千人投の數に合すけれど。地堪忍して去なしてやると。咬切る顔をじろりとながめ。詞ホ、釣船

面白い。どうして去なしやる。地サア見よう。掴みかゝるを身をかはし。ころりと投げたは百の錢。高い極めは此方の損。了簡して半分やる。此格でいがんだら大きな目に逢ひをろと。丸う捌いた男作。美しいので氣味悪く錢受取るも怖々。に。尻こそばうて雲助は。ッシ駕籠引つたけ歸りける。地磯之丞は靜々と。三ぶに一禮。詞狼藉者に出合ひ難儀の所。其許のお世話にて事なく納まり大慶致す。只今拙者流浪の身。時を得てお禮を申す爲なれば。お在所は何所承りたい。イヤさうあつては此親父所は申さぬ。長町邊とある故に。わしもちよつちよとあのあたりへ行きます者。長町は何町目。イヤ何町目かは存せぬ。三河屋の義平次を尋ねて參る者。ムウあの義平次に用があるとは。テモ變つた者にお近付ぢやの。イヤ近付ではござらねど其娘のおかち。

へエ。そんならおまへはてつきり。礪之丞様とやらでござりますか。とは又よく御存じ。サアかうでござんす。今日圍七が出て牢迎ひにおかちと息子と。わしが連れて来てやりました。道々お前の話聞きましてお笑止に存じますが。圍七がよい様にしませうぞ氣遣ひをさしやますな。おかしは官へ參られたが戻りの遅いは。エイトつきりとコリヤ坊主がだゝけて新家の葺屋。あつちやから行て昆布屋に居ましょ。三ぶに聞いたと言はしやませ。是は重疊。昨日は堺で目を暮し。今日は大坂へ參る所。よい所で其許のお目にかゝり。ア、其挨拶もゆるりと。マアちやつちやと行かしやませ。地然らば後程御意得んと。フシ昆布屋をさして急ぎ行く。アあの人よい所で俺に逢うたぞ。イヤ逢うたは逢うたが此圍七。もう來さうな者ではある。爰で問ふと暖簾をひらり。

詞床の衆今日のお拂ひ者いかう遅うござるの。わしや大坂から迎ひに來た。來るまで爰を借りませうとフシ待つ間程なくざわ／＼。そりや科人ぢやと見る人も十が九つ歪んだ世に。直なる道を引かれ來るは兵太夫が情にて。助かる恩と頼みの詞。オフシ身にしみ／＼と忘れず。地我が營みの生洲の魚。フシ沖に出でたる心地なり。地警固の役目は其日の當番御法の如く囚人が細解かせ。詞コリヤサ圍七。詳しくは屋敷にて介松主計。玉嶋兵太夫兩人申渡さるゝ通り。去年九月十三日。御家中大島佐賀右衛門が家來に手を負ふせ。雙方ともに牢舎の所。手疵は癒えて相手は牢死。其故死罪を御赦免なされ。和泉堺をお構ひなさる。ありがたう存じ率れと。地言渡す事言ひ仕舞ひオツリすぐ様。へ屋敷へフシ歸らるゝ。地後見送つて圍七は故郷の方を伏拜み。詞ア、忝

い。佐賀右衛門が中間つれの。下手人に取らるゝかと思へば無念で口惜かつた。兵太夫様お禮は申さぬ。其代り礪之丞殿身の上。地命にかへても微塵さら／＼御難儀はさせませぬと。ひとり吃く後から圍七。々々と呼んだはどこ。イヤ床からと。すつと出るはヤア三ぶ殿。詞ても珍しい息災にござつたの。ア、テヤ。おりや大坂から堺へ通ふ。わりや堺から大坂へ通ふ。商賈は違うても心は變らぬ懇意。了簡強い汝があゝした事。よく／＼聞かれぬ事があつてと思うて。擬案じたは出かした／＼。必ず恥ぢやと思ふなよ。江戸見ぬと牢へ入らぬと男の中ぢやないといふ。今朝から曉衆も坊主めも。連立つて迎ひに來て待つて居た。エちやつと顔見せてやりやぢやが。テモ長い月代。ムウ臭い着物。ぢやな。着替一つ持て來た。幸ひな此床で月代刺つて明神様へもお禮

申せ。おりや昆布屋へ行て落着かそ。アそりや大い世話でやした。貴様見ぬ中にきつう珠數ぢやの。サア今はとんとこれ。腹が立つても南無阿彌陀。笑ひくも南無阿彌陀。念佛講で忙がしい頼母子がはやる。扱と序に。汝が最良の片岡仁左衛門。扱當つた。頼良世へ持越して、今日日向丸をしてゐるわ。コレくこちらの辻札。竹本義太夫曾根崎の心中で打破つたの。マア一日見に行けやい。イヤこんな事いや日が暮れるが。一ついはにやならぬ事あるわい。おかたが話で詳しく聞いた。磯之丞殿にたつた今逢うた故。一所に昆布屋へやつて置いた。ソリヤわしが大事の人。サアくく其譯も聞いて居るてや。とかく昆布屋でゆるりと話そ。地おりや先へ行て居ると風呂敷包手に渡し。胸中にや錢も入れてある。月代剃つて早うおぢや。コレ床の衆一つ

してやつて。地頼みますとと氣を付けてフシ内と新家へ別れ行く。地我故にいとし男の身の難儀。聞く悲しさの跡追うて大坂へと計りあてどなく。走り躰き琴浦は瘡を撫でて。胸ア、爰は何所ぢやほんに住吉様。磯様と連立つて難波屋へもよう来たが。地もしやあそこにぢやあるまいかと。見返る後に憎い奴。佐賀右衛門が爰へ来る見付けられたら捉へをろ。どこへ隠れう。フシ間もあらせす。胸アコリヤく見付けたぞ逃げまい。お鯛茶屋からよう抜けそをやつたなア。俺がいふ事何と聞くぞ。元來貴様には此佐賀右衛門が行て居たを。アノ磯めが身請して。お鯛茶屋の箱入。指もさませず賞預しをる。そこで我等が幫間を持ち。獄道者に拵へ立て。勘當させた骨折も皆を様から起る事。風來人に心が残ると。仕舞のはては蕪田へ曝され。情所を犬や鳥がヲ思

ひ出すも身が頼ふ。まだ其上にひよつとすると。男は助つて女は死損。そんな危ない事せうよりさりとと氣を變へ。サアマあ難波屋で地祝言の盃せうと。フシ手を取れば。胸エ、嫌らしい聞きとむない。コレ爰をマア放さんせと。もがく程猶つかと握り。胸ハチびんしやんしても此大鳥が掴んでからは放さぬ。エ、憎てらしいあれエ。ハチはしたない聲が高い。高うても私や嫌ぢや。厭であらうが如何であろが。連れて行んで女房にすると。地合點せぬ者無理無體。引摺る意地張る床の前。ハチおぢやいのと引立てる。佐賀右衛門が利腕ぐつと暖簾ごし捻上げればアイタ、。胸こりやどいつぢや何ひろぐ。イヤ何もせぬ俺でえすと。地すつと出でたる剃立の糸髪頭青月代。胸ヤア汝や今日半から出をつた。ヲ、驚くまいへ、。團七でえすわいな。さ

つきにから出來まするよ。れつきとした侍が女童を掴まへて。マ、此手を放してやらうてやと。地拳痛めて突退くれれば。イヤ詞汝いらざる所へ出しやばつて。邪魔ひろぐか何とすると。地いうても相手にならばこそ。詞こな様があの。お鯛茶屋に居やしやつた琴浦様ぢやの。シテ磯之丞様に逢はんしたか。いゝやか。さうしてマア供はどこに居るぞ。地イ、エ

誰もないわいなと。話の半へ騙し打。團七二つと斬付くるを引つばづして、フシ翻斗打たせ。詞ハテ大膽な。そんな事ぢやさかいに。あんな悪魔が魅入りたがる。コレ私は磯様を世話にする。團七といふ者で。エイそんならお前がおかち様のお連合かえ。地アイ、挨拶と刀のあしらひ兩方を。受けつ答へつ又切る腕。柄と拳を一握つて。詞ムウそんならおまへ此方の喚。アイ知つて居りますとも。是はしたりと

踏みめし。ワリヤマアどこでは脊骨に膝。サイナア。お鯛茶屋へお迎ひにござんしてナ。始めて逢うて間もなく。磯様も私故に。コレ氣遣しよまい。磯様もついで其所にぢや。そこにとはどれ何所にエ。何處はツイそこの。コレ耳おこした。コレナア何と嬉しかろが。サ、ちやつと早う行かしやんせ。地早うくと磯之丞が。在所を囁き教へられ、フシいそくとして急ぎ行く。地ヤアあの女郎やる事ならぬと跳返して駆け行くを。首筋掴んで是はいな。詞コレ東側ぢやぞへ。此時宜必ずいふまいぞ。三ぶといふ者が居る程に。よろ頼んで置かしやんせえと。地底の底迄氣を付けて。世話やく隙に刀を鞘。納めた思案か佐賀右衛門。フシ飛ぶが如くに立歸る。地とは知らずお侍。もう去にやらいでと振返り。詞これはしたり。何所へ失せた。てつきり新家の香嗅いで。先

へはよもや廻るまい。地とはいへ道が氣づかひな。宮へはいつでも参らるゝと。心は急いで行く跡からおゝい。く、く、く。詞ハアテ呼ぶのにこな男。地待つて貰うと三人づれ。中に二人は以前の襦籠昇。襦袍布子のフシ懐手。詞ムウ俺に待てとは何ぞ用か。ハテ用がなうて呼ほかいの。こつばよなまよそろくと仕懸けやい。汝等でいかざ助けてやろ。地其間に抜きさいた髭抜かうと。床の床几に上足打ち。煙草入から出す鑷もフシなんほう太き説素なり。地いがみと早う見て取る團七。詞コリヤ出入でもする氣がなア。いらぬ事ぢやおけやい。イヤおくまいわい。名は言はいても頼まれたと言や合點ぢやある。ハテ高が先きの女中貰ひに來た。口手聞いらすと請取るかい。ムウ聞えたが。そんな事はぬものぢや。いはぬものとは。ハテサ渡すまいと言つた時に

や。ハ、ハ、ハ、どうもなるまいがな。コレ
これで貰ふ。くわい。此腕で。こつば
の權。なまの八が受取るわい。イヤ此奴
が避けて通せば方圖がない。もうきかぬ
ぞよ。ヤきかぬというて如何しやる。
地イヤかうくすると右左。ッしばたり
くくと蹴倒せば。詞イヤこいつ脚出した
ぞ。疊んでしまへ合點ぢやと。地床に凭
せし開帳札。手々に提げくして。滅多無
性に擲きかゝれば身を躲して掻掴み。引
つたくつたる後よりこつば微塵に打付く
るを。掬いだる札にて打落され。怯む所
を續打にはたたく。數も回向も二萬
日。弓矢八幡壺井の札。こらへぬ我武者
に打据ゑられ。二人ははぶく片息に。
後を頼むと云捨て、ッ命からく逃げ
て行く。地見てゐた奴は大膽者。髭抜きし
まひ鏡を納め。詞へ、ハ、ハ、ハ、テモ弱い奴等
ぢや。あれでも人に頼まれるぢや迄。と

いうて退けても居られまい。俺頼んだが
無理ぢやない。ドリヤ地出て逢はうとの
つし。詞團七ちよと下に居て貰ひま
せうわい。同じ棒組頼むに退かず。一寸
も後へは寄らぬ一寸徳兵衛が。ちよつと
マアへ、ハ、ハ、ハ、かうして見ようかいと。
地帯の前側ちつと取る。詞ホ、ハ、ハ、こりや
また身があつて面白いわい。そんなら指
詰斯うせうかい。ムウさう仕やりや。コ
レ。ヤかうする。ムウかうする。イヤお
りやかうする。地イヤかうするわと打つ
手。止むる手右左。片手にりんとッ尻ひ
つからけ。地出入花さく折も折。餘り遅
さに新家から。迎ひにおかちが唯一人。來
ればうたてや又喧嘩か。コレもう了簡さ
つしやれといふをもきかぬ掴合ひ。打つ
つ打たれつ止めても踏飛すやら蹴飛すや
ら。止めぬ仕様も變び立つ辻札取つて二
人が中へ。横に介した機轉の櫓。止まる夫
止まらぬ。相手の布子見知ある顔はヤア。
詞汝や此中の乞食め下れ。此方の人に何
で手向ひ非人めが。人でなしめと地叱ら
れて詞コリヤお家様でござりますかと。
地誤り入つた顔付で。ッ出入の腰は。
折れにけり。詞コリヤ女房。俺やすんど
合點がいかぬ。彼奴どうして見知つて居
る。見知つて居いで何とせう。短ういへ
ば礫之承様。お鯛茶屋からお歸りなされ
ぬ其時の思ひ付。お遊びなさる濱先で。
非人の喧嘩身の上話。こいらを頼んでい
はしたがお耳へ留つてお歸り。お袋様の
お悦び。其御褒美にあの布子。まだ其上
にお金もあり。それから止めた其形ぢや
な。ムウそんなら重々憎い奴。玉嶋の御
恩を著て。礫之承殿に仇をする。佐賀右
衛門が尻持つ恩知らずの畜生め。もう赦
さぬと飛びかゝれば地飛びしさてア、
待つた。詞其礫之承殿といふは備州

出のお侍。玉嶋兵太夫殿の御子息か。ハア知らなんだ。此徳兵衛も備中の玉嶋生れ。少しの科で追拂はれ。國を出た時殘して置いた女房へ釣つてもお主。俺が爲にも親方筋。其思はく琴浦殿に。横戀慕する佐賀右衛門に頼まれた。傍輩の尻持つたは大きな間違。遠引く所か俺も俱々。地お世話さして下されと。ほつくり折れる吉野尺。一寸徳兵衛が一分のッ立初とこそ知られり。地園七始終をとつくと聞き。縁につるれば遠の物と。こりや珍しい出合ぢやな。其詞違はずば。何ぞ慥な固をせうわい。ヲそりや何なりと望み次第。コレお内儀。此辻札の繪を見さしやれ。曾根崎心中の徳兵衛が。生玉で叩かれて恥面かいて居る所。其徳兵衛の看板で。此徳兵衛が出入を留め。かう打明けて融合うたは。明神の引合せ。エイ忝い／＼したが。俺やちつとの間も

薦被つたで。煩さがつて下さんなヤ。したがり餘り物は喰はんのだぞい。あのお人のいはしやること。地寺へ行た折開きやんした。百人一首の天智天皇様も乞食の相があつた故。木の丸殿にござつたけな。浮沈はある習ひと會釋に團七心付き。女房共。この二人の業は昆布屋にか。サイナ三ぶ様のいはしやるはな。男の所へ戻りがけ。掛人二人連で行んだら氣に入るまい。今夜は此方へ連れて往んで。女中一人は引請けう。磯之丞様はゆく／＼は。大事な奉公でもさせましたらよからうと。地市松と四人連先へ往んでござんしたわいの。ヲ、そりや慥々。慥な序に固はどうする。ヲ、腕ひかうか。血を呑まうか。イヤ／＼腕ひいたとて如何したとて。コレ肝心の突が据らにや役に立たぬ。がわが性根見据ゑた故。固の印渡さうかい。何なりとも請取らう。地コリヤ是を渡そと肌褌袴の袖引。ヲ切つて差出し。コリヤ是は園七が身に付けた片袖。磯之丞殿を世話にする。片腕にする證據の袖。とつくりと請取れよ。ヲ、面白い。互に心底包まず隠さぬ徳兵衛が。證據も又かうちぎつて渡すは。磯之丞殿を袖にせぬといふ印。どんな事があらうとも。御難儀になる事なりやそでないといひぬく證據。サア請取れ。サア請取れ。ヲ、請取つた。／＼と。地互に取替へ手に通し。俺が此袖かう肩に引きかけて世話したらなう徳兵衛。ヲ、俺もかう引きかけりや。ヲ、氣遣は微塵もない。俺も大坂へすぐに出よう。そんならばサア連立たう。サアいかう／＼と。地裏表なき氣の廣袖。固はしやんと住吉の。亡者の袖よりのたしかな袖。引連れてこそ三重へいそぎ行く

第四

手代が戀を抽出した
浮牡丹の箱入娘

ヘルン 難波津に。地妻も眼の内本町通筋を
堅横に引廻したる角屋敷。道具屋の孫右
衛門とて手廣う商ふ大商人。表には茶の
湯の道具時代蒔繪の道具類。ヘルン 和漢
の器物を店一ぱいに取廣げ。フシ人も羨
む居なしなり。地重手代の傳八は埃叩き
を斜に構へ。掃いつ拭うつ代物に。花を
飾るは此家の娘。嫁入盛のぼつとり者と
小オクリ人も。心をよせ敷の。スエテ 暖簾の
陰よりコレ傳八。詞清七は其所に居やら
ぬか。ハアお中様。清七は今藏へ道具出
しに参りました。何の用でござりますすえ。
ヲ、それならわがみでも大事ない。此五
十兩の金は屋敷の爲替。伏見町の加賀屋
へ渡しやと父様の云付。エ、其用ならば
俺が請取つても濟む事を。新參の清七ば
かりしなつこらしう物いうて。聞えませ

ぬお中様。地幸ひ外に人もなし。かねく
のお返事を。ちよつと爰でとしなだれか
ければ後より。詞傳八く。且那殿の呼
ばつしやる。ホウ清七か。地何の用ぢや
知らぬ迄と云捨て立つて入りければ。詞
コレお中様。さつきにから傳八とぢやら
くらく。又清七のあられもない疑ひ。
地私が心を知らぬか何ぞの様に。フシ聞え
ぬ人ぢやと寄添へば。詞コリヤく。清七
見付けたぞ。エ、われは横著者よう嘘を
ついたなア。且那が汝を呼ばつしやる。
地きりく。行けと傳八が。どつちやう聲
にびつくりし。フシこそく。と入り
にける。詞コレ其様に何くはぬ顔さしや
つても。如何でもきやつと合點がいかぬ
と。地いひも果てぬに傳八々々。詞コリ
ヤ手の悪い嘘めく。今こそ且那が眞實
呼んでぢや。イヤく。嘘。俺を取るのぢ
や。ハテ嘘か誠か行て見りや知れる。地ハ

アそれならば行てこませ。フシけたいな
事ぢやと走り行く。詞コレ清七。今言う
た通り。疑うてたもんなや。地死なしや
つた母様の言置なればこの中が氣に入つ
た男でなけりや私や持たぬ。殊にそなた
の氏素性なら器量なら。どこに一つ難癖
のないも理り。玉島礮之丞様。くくく
といふ口抑へて。ア、わつけない。詞
そんな事いはぬものと。地人目を忍びひ
そく。と。吹き囁く其中へ。得意廻りの
肴屋が。詞御用ござりませぬかと。地門口
から音なへば。ちやつと飛退きけんによ
もなう。詞ホウ九郎兵衛精が出ます。ソ
レ魚屋が来て居らる。と。お乳母にさう
いはしやませ。地早うく。を鹽にして。
フシお中は勝手へ走り行く。地どれく。肴
見ようかと此家の狡猾乳母。煙管片手に
表へ出で。詞今日は且那様の病氣本復の内祝。館でもせうかと思ふが。もやすい

物があるかいの。されば此間の粟花落上りあはれで。雑魚場ざつぎやうにも物が少うて。籠かごにさらりと見えた通り。マア此鯛がぶりばんどう。ヲ、俺おれやそんな事知りませぬ。おつと。知らでは二匁八分。ヲ、そりや高いそれなら江餅えもちが十で八分。さればなう。地秋ぢあき口から段々に名の變るが江餅の出世。祝ひ事よからうか。詞イヤ名の變る序に團七殿も。前堺から見えた時と。今は名も變つたけな。どうした事で變へさしやつた。されば、去年えらい難儀に遭うて。大坂へ引越し心も入れ替へ。名も九郎兵衛と變へたれど言ひつけた名なれば。今に於て團七九郎兵衛といひまする。イヤもう次第しだいに豆まめの數が重なる程。心もひとり直るもの。爰に居さしやる清七殿も。俺が請まもりに立つて手代奉公におこしたが。死なねばならぬ程の事でも。堪忍こらへするが若い者の嗜せしやう。奉公する身は猶

もつて。物事ものごと怵おそへさつしやれ。まだ嗜むのが色の道。イヤ色で思ひ出した。繪えの子には此赤貝あかゑいがよからう。なうお乳母様。ヲ、とでもない大口いはいしやる。地内祝ぢうちねいしゆなれば輕うても事が濟む。どうなと此方こなたよい様に拵こしらへて下されと。勝手へ行けば聲をひそめ。詞申し儀ぎ之丞様。なされも付けぬ奉公でさぞ御難儀。お國へ歸參なさるゝ迄は。隨分辛抱なされませ。ヲ、さうぢやとも。何かにつけて其方のいかい心づかひ。ハテやくたいもない。そんな事ぐづぐづ思おもうて。煩わづうて下さります入りにける。地かゝる折節表せつせうの方へ一僕ぼくつれたる田舎侍。道具見物致さうかと店先へ立寄れば。清七庭に飛んで下り。詞ことばようお出でなされましたサア、あれへ。暫しばらくお腰掛けられませと。地挨拶じあいさつすれば傳八も奥より出で。ソレお煙草盆お

茶ちや持もて来いと。埃叩はくちやくで揚あり口叩くちやくき立つるも商旦あやう那なへ、フッ馳走ちしゆぶりとぞ見えにける。イヤ苦くるしいない構かまはれな。何と昨日けふ見た浮牡丹うきぼたんの香爐かうろ。五十兩にまけ申さぬか。されば私も段々申して見ましたれど。八十兩の口が一步い缺けてもならぬと申す。畢竟手前の道具なれば。又御相談の致いたし様さまもあれど。と申して私が。かはくなく錢ぜにを取るでもなし。重ねて御用も承りたさに力ちから一いばいなう傳八。ヲ、さうぢや。後々が大事なれば。買損かひな物お勸め申さず。見る所が正眞せいしんの。浮牡丹にまがひなければ。五十兩には強つよい掘ほ出し。此頃も一休いっけの正筆せいひつに。坊主ぼくしゆになるな魚を食へ。地獄じごくへ行いて鬼おにに負けるなとある假名物なまものを。紙屑しせつ買かひが十九文に買かうて來て。大分金を儲けたと。大坂中の評判なれば。地少々ぢちやうは思おもひはつして。どうぞお求めなされませ。清七も隨分とお肝煎かんせん申しや。

同成程拙者も正眞しやんじんと見申した故。五十兩に付け申した。國元より申して参つた殿の御用なれば是非求めではなり申さぬ。地是に預り召されたらば今一度見申さうと。詞の中に箱取出し。フシ袋を開きさし寄すれば。地成程是々。浮牡丹に違ひない。かう致そ。マア五兩付けておくりやれ。直ちやがなつたらば明日屋敷から。金子持参致させう。同じくならば今日中に。なるならぬを聞き切つて歸りたい。それならば追つつけ仲買も参る筈。地見苦しくとも暫しばしが中。あれへござつて御休息なされませ。詞それは幸ひ。然らば少しの間。座敷御無心申さう。地御免々々と傳八が。フシ案内ないに連れて入りにける。地待つ間程なく仲買彌市。詞ヲ、よい所へわせられた。幸ひ香爐を求めたがるお侍も来てなれば。今日埒を明きやらぬか。埒と言つてどの位ぢや。ハテ今朝いうた通

りに負けやいの。イヤ、氣けもない事。所方々の開帳へ貸しても。損料はそれ程取れる。八十兩といふ發句はつごから安ければ。負けぬ。それなら俺が取る口錢を打込んで。も一兩で手を打たう。さればなう。急に小判にしたいのなれば。先へ問はずと負けませう。さうり地と手を打つて。詞扱いはぬ事は悪いが。明日でなければ金が渡らぬ。其時香爐と引換へ。ヤアそれでは此方の工面が違ふ。百兩の代物を五十兩に賣拂ふも。今日金子にしたさ故。所詮こりや埒が明くまい。人の大事の道具ぢや。香爐を此方へ戻して貰ふ。エ、埒もない事に足手を引いて悔いしい。コレ彌市。さう没義道むつぎだうにははれな。向うも堅い武士なれば。明日金を渡さうといふ議定ぎていはちつとも違ふまい。ハテひちくどい。明日というてはならぬと云ふに同じ事をぐづくと。自體和御儀わごぎが埒

明かず。明かぬも道理か。やう、此頃この内へ奉公に来て。道具の道も知らず五十兩といふ香爐を。夢に見た事もあるまいに肝煎かんせんかきやるが大きな違ひ。ムウあぢな云分いぶん。道を知らうが知るまいが。香爐を肝煎つて買はしたら何とする。ハハ、うまい事いはれな。五十兩といふ金の盜ぬすせうば知らぬ事。温ぬるか。よう出ようぞと。地氣きを持たずれば猶急やま上げ。出して見せうが汝おまを見るか。イヤなるまいとフシ角目かくめ立つて争へば。地傳八も出て横突張り。詞あゝ言はれては清七立たつまい。傍輩たがひ迄の面汚めんごしなれば。旦那から講取つた屋敷の爲替五十兩。地傳八が貸してやる。此金渡して男を立てい。誠にさうぢや忝かたじけないと。封押切つて五十兩。香爐の代金サア請取れ。も一度烟術えんじゆつ叩たたかいでなと。フシ小判ぐわりと投付なければ。地彌市はにこく拾ひ上げ。詞畢竟今の様に云うた

も。今日金が請取りたさ。商人は相身互。
耳に障つたら了簡さしやれ。仲間同士は
いらねども。素人から出た道具なれば。
念の爲ちや賣上書かう。ドル硯貸さつし
やれ。イヤモウさういやれば言分がした
うもない。それなら嬉しい。地又掘出し
があるならば持つて来ませう。さらば
くもそこくんに。ッ金受取つて立歸
る。地一間の中より最前の侍。刀提け立
出で。扱お手代衆。先づ以て今日は忝
い。座敷を御無心申した上。色々馳走に
預り思はず一睡。地さらばお暇仕らうと
いふを清七暫しと止め。扱お頼のかの
香爐。どうやら斯うやら五十兩にさらり
と埒は明きながら。氣の毒は今日中に金
請取らうと申して。私とやつつかへしつ。
詰開の上で。當分手前の金子お取換申し
たれば。明日中に香爐の代金。地お渡し
なされて下さりませと。聞きもあへず。

イヤコレ若い者。手前其方を頼みて。香
爐買つた覚えがない。ハ、ハ、御座興も
事による。イヤ座興でない眞實ぢや。エ
エ昨日も今日も香爐を見て。金五十兩に
直段をお付けなされたを傍輩どもも聞い
て居る。それでも覚えなないぢやまで。ム
ウこれお侍。いかに口先の契約ぢやとて。
今更さうは言はれまい。街と見たりや猶
以て。首筋抑へて買はさにやおかぬ。イ
ヤ此奴慮外者。身に覚えのない事を云ひ
かけるさへあるに。武士を捕へて街とは。
素町人めどの頼拵でぬかした。サア地今
一度いうて見よ眞二つにぶち放す。イヤ
く、詞いふまい。俺も腹からの町人でな
ければ知つて居る。さうした武士の性根
で人が切るゝ物でない。ヲ、切つて見せ
ろ勤くなと。地刀の柄に手をかくれば。
傳八中へ割つて入りア、お前のが御尤。
まづ暫くと押しとどめ。コリヤ詞清七。

今の金戻して貰ふ。イヤサ其金は此侍に
請取つて戻さう。此香爐をそれまでの質
物。ア、言ふな。明日渡す爲替金に。質
物取つてよいものか。扱は彌市めとぐる
に成つて此傳八を街つたか。親方への面
晴ぢや。地覺悟し居ろと飛びかゝり。響
掴んで投付くる強力者。脊骨にぐつと乗
つかゝり大盗人の生街と。握拳で滅多打
ちそこ退け傳八。悪口ぬかした其頼拵。
蹴裂いてくれんと踏付けくゝ相すりども
が責め殺生。かよわき清七手ざしもせず
ステテ無念。々々の聲に驚き親方孫右衛門
團七も走り出で。傳八が首筋掴み引擔き
取つて投げ。踏付ければ侍がずはと引抜
き切りかくる。利腕取つてぐつと捻上げ
顔見れば。我が舅三河屋義平次。ヤアこ
なたは。ナニ御自分は。はてな。く、お
侍ぢや迄。御仁體に似合ひませぬ地嗜ま
れよと突放せば。舅も俄に力みを止め。

悪い所に聲が居て贅侍の手め上りと。水
淺黄の帷子をッ汗にひたして尻ごみす。

地親方は斯くとも知らず。詞段々御立腹
御尤。とかく憎い奴は手前の家來。たと

へ香爐を求めうと仰しやつたにしてか
ら。篤とあなたに折極めもせず。金お取

換申したは清七めが不調法。殊に其彌市
といふ者仲買で聞及ばず。何にもせよ胡

亂な事。地マア此浮牡丹の香爐から。合點
がいかなぬと袋を開き手に取上げ。ヤアこ

りや贅物。ものゝ見事に衞られたと。地
聞くより清七すんど立つて。駈出すをこ

りや何所へ。彌市めをほつけて衞ら
れた金取返す。ハ、ハ、甘い事ははれな。

これ程の事仕出す奴が。此邊にまひく
と狼狽へて居てよいものか。氣づかひせ

まいもう是から此圍七が。どいつもこい
つも詮議して。衞られた金取返す。コレ

お侍。御自分には猶以て。ぐつと言分の

ある人なれど。心があつて今はいはぬ。
足元の明いうち疾と一早く去なれいと。

地突飛せどびくともせず。詞身の證明さ
へ立つたれば。居よというても此所には

居ぬ。町人めらを相手には猶せぬ。親方
もどいつもこいつも。言分はないぢや迄

と地ッ立上るを。詞コレお侍マア待つた。
待てとは身共に用あるか。ヲ、九郎兵衛

がいふ事ある。エ、こなたはの。見るも
中々腹が立つがようござつた。地ヲ、歸

るわとしらばけに。ッ家來引連れ立歸
る。地孫右衛門眉をしわめ。詞何をいふ

も彼をいふも皆こつちの不調法。手前の
用心ようすれば盗人にもあはず。巾著切

に取られもせぬ。ヤイ清七。汝も是迄率
公も仕つけず。悪う育たぬやつと思ひ。

不便をかけて使うたれど。大枚の金を衞
られたは引負同然。金の濟む迄請人なれ

ば九郎兵衛に急度預ける。ア、成程。そ

りやもう請に立つからは覺悟の前。衞ら
れた金の行端。詮議しぬいて御損はかけ

ぬ。サア清七殿立つた。イヤくま
だ明い内に其形で去なしては。此孫右衛

門も名が出る。地此編笠を親方の。御
恩を戴く目塚笠。言ひ甲斐もなき不屈者

とお憎しみもあるべきに。お情深き御詞
有難し忝し。詞私とても金を衞られ打擲

にあひ。どう存へてゐられうぞ。地清七
が心の内。御推量なされ下されと。悔涙

に顔をも上げず。もうお暇と圍七が預
重荷と看の荷。一荷にしやんと打撥け。

ッ表に出で。詞ア、これ大事な。ハ、ハ、

此九郎兵衛が居ますわいの。サアくき
な。思はずと早うごんせ。エ、残り多

いさつきの時。あいつ等が脚骨。ぼつき
ぼきと折つてやりたい。鯛フンや。鱧ヲ

コウ生イ鱈や。より物コウより物。車海
老。地賣りく連れて出でて行く。もはや

世間も店さし時分。傳八表に氣を付けて。とつくりと錠おろせ。ア、一日も苦の止む間がないとオクリ、呟き。へく奥に入る。ハッシあるにもあられず。娘のお中人のない間を窺ひ。表の方へ走出で。ヤア、清七はもう行きやつたさうな。互に詞は交さずともせめて顔を見てなりとも暇乞と思つたにひよんな事してのけた。あの金の濟む迄は逢見る事も。地ッなるまいし。地清七の今の詞を聞くに。生き存へては居ぬ心。詞わしも後から追付いて。地死なば一所と駈出で。表を見れば錠おりたり。ア、悲しやどうせうぞと。ッシ立つたり居たり狂氣の如く身を揉み。あせり歎きしが。詞ヲ、それよ。地あの人より一時も。其地早う先立ち二心なき心底見せんと娘心で。半太夫一筋に。思ひ詰めたる手箱より。取出すは珠數剃刀。此世の。縁は薄くとも。ッシ未來は一つ。運ぞ

と相ノ山涙。ながらに繰る珠數の。詞いとほしや父様の。わしが死んだら悲しから。此清七も今頃は。どこにどうして居やるぞい。地も一度顔が見て死にたいと聲をも立てずさめくくと。スエテ忍び。涙にくれるたる。地乳母は娘の形素振心を付けて居たりしが。後より何氣もなうお中様何してぞと。聲をかくれば悔りし。詞ヲ、乳母とした事が。きよとくしい聲わいの。今宵は。アノ母様の速夜なれば。それで珠數をくつてゐると。地權輿もない顔付を。乳母はつれなく打眺め。エ、詞こなたは聞えませぬ。生れ落ちさしやると。十七年の今日まで育て上げた此乳母に。なぜ物を隠さしやる。ヲ、あの人に。隠すとは何を隠す。あれまだあらがうてぢや。其顔鏡で見たがよい。ソレ目が泣きはらしてあるわいの。それでも物を隠さぬのか。地とうから此方と清七と。わ

けある事知つてゐる。ア、よしない事ぢやと思つたれど。獨子の事なればどうで聲御を取らねばならず。氣に好いた事ならば。詞ア、どうなりと行くくは。旦那の耳へ入れうと思つてゐた中に思ひも寄らぬ。清七殿の仕損ひ。地金の濟む迄請人に預けたをこなたの氣では。萬劫末代逢ひ見る事もなるまいかと。思ひ詰めてさつきから。詞死ぬる覺悟であらうがの。地萬一其身にもしもの事があつたらば。詞後に残つた父御の身では。なんぼ程地ッシ悲しからうぞ。地殊に此春の大病から。あの弱りが目に見えぬか。こんな事聞かしたら。先へ死んでのけさしやろ。いふさへ涙がこぼるくと歎けば一間の内よりも。親孫右衛門の聲として。詞乳母よく。用がある早う来い。ア、アそこへ参りますと。地鼻打ちかみて聲を潜め。そのみならずお袋様御臨終の枕

元へ。此乳母を呼付け。詞何にも心にかゝらねど黄泉の障は此娘。汝母になりかはりて育ててくれとの一言が。耳に残つて忘れねば。地乳母はコレ此様に。皺も白髪も厭はず。こなたの脊丈の伸びるのを。蝶よ花よとヲシ染みて詞おのれやがて智御を取り。玉の様な子を産まして。乳母が死んだ其時に。冥土にござるお家様に。土産にせうと思つてゐるに。病でもある事か。地美しい其肌。刃をあてて死なうとは未來の母御を奈落へ沈め。アレ此世の父御や。コレ此乳母にも。泣死に死ねとの事か。地あんまりむごい胸怒なと聲をも立てすかきくどけば娘も俱に正體なく。詞乳母誤つたこらへてたも。やいの。地くんと手を合せかつばとヲシ伏して。泣き居たる。詞乳母よく。さつきにから呼ぶに埒の明かぬ。お中もきりく寝ぬかいい。アイくもう其所へ

参ります。コレ乳母。地呼んでぢやにマア行きやいの。詞いやく行かれぬ。おれが行た後で。こなたが此刺刀では々せうでぢやのヲ、怖しや。コレよう聞かつしやれ。今はやる心中も。金と不孝に名を流す。清七の誤りも。五十兩あればつくらたとへ千兩萬兩でも。我が子にかへる賣はない。詞此乳母が金とてはなけれども。氣遣ひさしやるな。どうぞして金調へ。地清七殿さへ歸参しやれば添はれまいものでもない。ツシ力を付ける折こそあれ。詞乳母よく。用があるになぜ來ぬぞと。地孫右衛門は息急ぎ立出で。詞俺も今日のもやくで。きつう氣が上つたや。戸棚の鍵の置所をとんと忘れた。乳母。わが鍵を貸してくれ。ヲ、それはひよんな事やの。わしがの長持と箆笥と。數もない二つの鍵。ハテ二つぢやと

合ふまいものか。あはねばもとく。アイ成程どれくと。地吹散りさうな巾着より。鍵取出せばヲ、これくとヲシ提けて行く。詞お中様あれ見さしやれ。時はあの様に。金戸棚の吟味があつては。思ふ様になりにくい。地ア、どうしたらよからうと。思案とりく様々に。ツシ二人は胸を痛めける。詞乳母よく。今の鍵がよう合うたぞ。金戸棚を明けて見たれば。中にきよろりと入れて置いた。アア年寄れば物忘れ。ソレ鍵戻そ。宵からは氣にかゝつて。むしやくしやと寐られなんだに。是でさつぱりと夜が寐よからう。お中も寐冷せぬ様によう着て寐よ。もしわれが煩うたらばおりや何とせうぞいやい。地乳母も休めと孫右衛門。ツシ心を殘して入りにける。詞さつても不思議ぢや。まへお家様のござつた時。丁度此様に金戸棚の鍵が見えいで。此鍵を合し

て見たれど。氣もない事合はなんだに。

地今此錠の合うたのは合點がいかぬとよ
くく見て。詞コレお中様。今迄二つあ
つた錠が。三つになつたはこりや如何ぢ
や。ほんにの。此錠は父様が。不斷提け
て居さつしやる。金戸棚の錠ぢやわいの。

エイそれなれば此錠で。戸棚を開けて金
取れと。口では言はれず心の謎々地ハア
ア忝なや尊とやな。是皆親のお慈悲ぢや
ぞや。マアコレちやつと拜まつしやれと。

いへば娘も後影。伏拜みくッ嬉し。涙
に暮れ居たる。地乳母は悦びサアお中様。
一時も早うくと氣をいらてば。イヤ
く待ちや。父様はまだ寐すにてあろ。答
められたらどうしやる。ア、愚な事いう
てぢや。コレ親の慈悲にはの。目を明いて
寐てござる。地おれ次第にしてサアござ
れとオトリ打連れ納戸に入りける。ハルッシ

夜も早四つのかねてより。思ひ定めて清

七は。頬被りに一腰ぼつ込み内の様子を
窺はんと門に耳寄せ。ッシ聞くぞとも。知
らずお中は今宵の首尾。清七に知らさん
と戀には太き抱帯。引きしめく表に出
で。詞エ、ひよんなまだ錠が下りてある
と。地咄く聲を表に聞取り。詞お中様ぢ
やないか。さういやるは清七か。地なう

なつかしや顔見たやと思へど叶はぬ此錠
前と。潜にひしと身を寄せてッシ聲をも。
立てず歎きしが。地扱もくそなた故。

今日一日の物思ひ。詞イヤ私とても金を
街られ。團七に預けられのめくとして
ゐられず。拙者が難儀の元はといへば。
おまへの事を妬に持つ傳八が皆する業。

彼奴を今夜人知れず。ぶち放して仕舞ふ
合點と。地いふをお中は聞取つてイヤ其
思案は止ししや。それに及ばず悦ばず
事がある。コレよう聞きや。口でこそお
つしやらねそなたにやれとて父様が。金

五十兩下さつたと。聞くより清七手を合
せ。主人のお情有難しと。戸に耳寄せ
口を寄せッシ咄す折から内よりも。詞お中
様くと地呼ぶ聲に。そりやこそ人よと
清七は。四辻の番屋の戸。ッシ引明け内
に忍び入る。詞エ、お中様。旦那殿の呼
んでぢやに爰に何して居まつしやる。惣
體今夜はそはくと合點のいかぬ身振。
それで此傳八が戸口に錠を下したれど。
地俺がるれば氣づかひないと。錠取出し
潜戸押開け。お中をほうど引抱へ。旦那
の呼ばしやるは嘘。俺が此方に逢ひたい
故。ちよつとござれと口に手を當て。無
體に表へ引きすり出し。詞コレよう聞か
つしやれ。清七めをほひ捲つたは此方に
靡いて貰ひたさ。地所詮親方の内では自
言辭があらうと思ひ。此方をぐつすり入
れて置く。どや迄仕覺してあれば。是非
今夜撥けて退く。も一返り内へ行て臍線

銀取つて来る間。爰に待てというたとて待つてぢやあるまい。阿イヤ幸ひな入所と。地泣沈むを無理なりに。番屋へ押込み手盛を食うて傳八が。外からしやんと閉括り。扱どうしてかうしてと胸算用の胴中へ。提燈さけて仲買彌市。阿これはく。よい所で傳八殿。今日は五に上首尾上首尾。晝の儲の五十兩。三河屋の義平次と。こなたとおれと三つ割。金渡す請取らしやれ。地ヲ、成程々々。早速ながら頼みたいは彼のお娘。今夜連れて退く工面で番屋へ入れて置いたれど。俺が今動かれぬ。大儀ながら彼のどや迄連れて行て。阿傳八が行く迄動かすなと言うても。地頼むくと言捨て内へはひればヲ、合點。生物を預るからは油断がならぬと尻引からけ。サアお娘出られいと。何心なく番屋の戸。ぐわらりと開けるを灯影に透し。阿彌市めか。ヤア清七か。

地こりや叶はぬと逃げ行くをほつ断けばつ詰め抜打に。肩先より脊骨迄。大袈裟に切り放せば。其儘息は提燈と俱に消えたるヲ戀慕の闇。かくとも知らず傳八は。彌市。々々と闇黒を。探り廻つてハア爰にかと。清七が手をちつと取り。阿今取つて来たこの金と。配け口の金と二包。其方に渡す。是でよい様にどやの支覺してたも。命金ぢや落すまいぞ。地追付け其所へ行く程に早うく。お娘もめろく泣くまいと。いふ中に傳八々々。早うくと呼立つれば。ア、せはしや是では何をいふ間もないと。一度ならず傳八が。二度の手盛にうまい。くと舌打して入りければ。阿コレ清七。お中様。地サアござれと手を引立て行方も。知らず三重へ走り行く

第五 道行妹脊の走書

阿ヲ、ウイ。△く。○これ早う来てたもいの。△ア、嬉しや今のは追手ではなかつたさうな。○ヤアあの二ハルシ鐘は九つ心も。戀路の間に。迷へど道はヲ迷はじと。松屋町筋一筋に。長地思ひ染めた紅桔梗お中が振の目立つにぞ見えつ隠れつ軒傳ひ。戀の道には主従のわけも隔ても夏の夜に。本シ空の暑さは凌けども。越すに越されぬ人目の間は。よに大坂の町續き。ヲシオクリ行けどユリへ歩めどヲシ果敢なきは。人を殺めて狭き世の。憂身を何と清七も心の覺悟書き残す。ステテ筆の歩も道筋も。俱にあやなき矢立の墨。薄き此世の契りと知らず。わしと其方はあの常盤町。サハリ千歳の末の末までと。戀ゆるつくる罪科を。かけて見せばやナメスヲシ兩替町。露の命の價さへオクリ見

る影。ほそき資資の灯。假初ならぬ身の上か。さらさらと走り書。餓餓蕎麥切きりと。フシ急げば跡は。暗きより暗きに迷ふ墨衣。後の世照らす提燈のオクリ影に。立寄る二人連。死に行く身か痛はしやと。同向の聲も松虫の鐘細々と打鳴らし南無阿彌陀。くくく南無阿彌陀くくく。いつかフシ火宅を和泉町。

我が故郷の名に愛でて。影はつかしき朝日の宮。逆櫓の神も古の武士の身ならば祈るべき。今一腰とくづをれて遂に七ツリ此身の尾張坂ヘルシ登りつ下り。つしやなくと。三ツリ歌思ひ合うたる。二人が中は。陰と日向の。二つ紋。來たわいなく。忍ぶ戀路は。闇こそよけれ。顔が見たさに。又傍へ。來たわいなく。いとしかはいと。ナホスツシめ合うて。變るな髪らじ瓦屋橋。我を尋ぬる返せにあらで祭鳴らしの。へ太鼓鉦現か夢か夢な

らで。フシ極樂橋も早渡る。短き縁も長町裏三ツリタ、キ稻葉そよく吹く風に。連れて聞ゆる寺町の。鐘も幾つか四つ五つ。六つの御手に愛敬を願ふもナホスツ嬉し勝曼坂。此世からきへ浮む瀬に。騒ぐ火影のほの見えて。歌思切れとは死ねとの事か死ねば野山の私や土となる。ヘルシ死ぬる覺悟と。死ぬる氣と心々の野邊の露。異地今宵限りの命ぞと書き置く筆の藻汐草世の浮草や道草に。急ぐ先さへ的どなく夜道はいと身も疲れ。心づくしの天満神を。スエテ爰にも移す神垣や。安居の。フシ森にぞ着きにけり。

地お中はあどなき娘氣にてコレなう清七。何かう思ひ合うて出たからは。云ふに及ばず眞の女夫。殊には二人暮す程。貯へに事缺かねば。夜明けぬ中に其方の故郷。和泉へ行て一日なりとも。地二人一所に暮したいと心、フシそく急ぐに

ぞ。詞ヲ、成程。所存をわけて咄さねばそれも理さりながら。金を街つた彌市めなれども。殺した科は遅れぬく。たとへ隠れ忍ぶとも遂には探し出され。紳首討たれては。親一門の面汚し。物の見事に切腹せんと。道すがら清七が覺悟極めた此書置と。地聞くよりわつと泣出し。常々もいふ通り死ぬるとも生きるるとも。一つ所と云ひ交したに親に代へた大事の男。のめくと殺して生き存へて。ゐられうか。ほんに聞えぬ胸愆なとフシ恨み。託ちて泣きるたる。ヲ、詞其志は過分なれども。よう物を合點さつしやれ。二人一所に死んではの。安居の宮の心中と。

大坂中の口の端にかよつていよく恥の上塗。地イヤどうあつても一所に死ぬる。死んでの後は笑はれても恥かいても大事ない。所詮ながらへ果てぬ身を。早う殺してくと。最期を急ぐ心の中思ひやら

れてハルッシ痛はしき。地かゝる折節向うより。野道呼道ぶら／＼とふらつき廻る小提燈。振上げてヤア儀之丞様か。詞三ぶ殿か。三ぶ殿所ぢやござるまい。九郎兵衛が留守の間に何方が知れぬ故。預り人を取遊すといひ。萬一こな様の身に過あつては九郎兵衛が男が立たぬと日頃のあれが氣。上を下へませかへし。川崎北野梅田堤の北方角は。九郎兵衛と一寸徳兵衛と二人づれで尋ねに出る。此女中は聞及うだ道具やの娘御ぢやの。かうあらうと思つて。此釣船も難波今宮生玉勝鬘。心中くさい所を目利して尋廻り。今爰で逢うたのも。願ひ込んだ珠敷のお蔭忝いが。二人共に嗜ましやれ。僅な金を貸られたとて。心中して死なうとは無分別の花盛。娘御の内もさぞ騒動。世間へばつとならぬ中。地サア／＼早うと、氣をせいたり。ア、お世話忝い。知らる

る通り清七も以前は武士。色に溺れ心中する所存でなし。我が心底ぐどく／＼いふに及ばず。地此一通に認め置くと渡せば取つて押開き。提燈さし寄せ。詞フウ何ぢや。書置の事。仲買彌市に意趣あつて今宵手にかけ切殺し。ハア南無阿彌陀佛なり。扱は其街めをお前が殺してしまつたか。したり。それで死ぬる覺悟ぢやまで。コリヤ尤も。／＼。したがよう切らしやつた。後生一遍に取入つて居る此三ぶでも切らねばならぬ。ア、切ります。誓文切る氣ぢやが。死ぬるには及ばぬ。何故といはしやれ。マア第一に彌市めはどすごかしの大衛。殺すが世界の爲なれば。根深う切人の御詮議もあるまい。たとへあるにしてから。暫しが間蔭してござれば濟む。此釣船が吞込んでからは。大船に乗つたと思つて。地氣遣せまいと

頼もしき詞にハルッシ二人も安堵せり。詞アレ見さしやれ。他にも此手がはやるやら。無上に人を呼びますぞやと。地いふ間に近付く呼聲は慥にお中と聞える／＼。何にもせよ此體を見付ければと提燈吹消し。三人諸共かしの木蔭に、ッシ忍びる。地清水の方より迷子のお中様。迷子娘のお中様と呼び／＼来るは道具屋傳八。出入の男が手ん手に提燈棒つき散らし。淨瑠璃やら物真似やら身にかゝらねば半分は。雑口まじり聲々に我も、ッシ／＼と呼立つる。地傳八ほうどくはぬかし。詞どう因果な娘にかゝつて。土用の中に駈歩き身體は斑枝花。男共もさぞ草臥。イヤもう草臥も大概。かう打揃うて歩いても。祭の俄と違ひ所望がなうて淋しいな。ハレわつけもない。こちとらにはせいめきめ尋ねまはらして。てつきりとお中様はどごぞの蚊帳へぐすと入り。両面子を見

る様にひつ付いて居さつしやろ。イヤさういはれぬ。ことしの様に愛かしこで。

切つたの突いたのが流る時は。上になり下になりつかれて死んであらうも知れまい。序に茶臼も尋ねて見よう。ヲ、そりやよい氣の付けやう。十が九つ清七

めが連れて退いたに極まつた。傳八は休んでゐる。大儀ながら尋ねてくれい。地心得太郎兵衛の婆様ではない娘御と。ッシ

仇口々に急ぎ行く。地お中は木蔭を走り出で。詞どこぞそちらに清七は居やらぬ

か。清七。地々々と尋廻るを傳八が。熊鷹眼見付けたぞと驚掴み。なう傳八が悲

しやな。情にどうぞ見遁して死なしてたもと泣詫ぶれど。びつくとも動かさず。

此方にかゝつて大勢が亂離忽敗。それ程に死にたくは見遁してやりもせうが。エ

エこなたは聞えぬぞや。ようおれを出しぬいて駈落さしやつた。此清七めは

何所に在る。されば今夜清七と死ぬる覺悟で来たれども。俄に心が變つたやら私

を捨てて胸欲な。あの人に見捨てられ片時も生きて居ぬと。地駈出すを又抱止め。詞それ見てか。俺に酷う當つた罰。今から

傳八がおか様になる氣なら。且那の手前はよしなに云はう。地どうちやくと懐へ無理無體。イヤく放して殺してたも

といふも聞かず手を差入れ。肌につけた

る金財布に探り當るも欲垢煩惱。色も戀も投げやつて欲に目のない傳八。金せしめうと分別しかへ。詞ハテそれ程に死に

たくば見遁さうが。よもやよう死にやさしやるまい。イヤく死ぬる。冥土から

此恨清七にいはいで。とはいふものこの双物はなし。竟に死んで見た事なければ。

どう死んだがよからう覺えてなら教へても。ハテ滅相な。誰ぢやて、死んで見た者何所にあら。双物がなくば無いやう

に。世間通用の首くり。サア其首はどうして締める。そなた何卒教へたも。これは迷惑。明日からは首しめの。指南の看板を出さずはなるまい。こなたは己が首

くりの一の弟子と。地三尺手拭かへ帯。ひとつにしやんと引結び傍なる杖に

しつかと括り。詞扱これからが首しめの習ひ事。よう見ようぞや。此喉の佛様を。

かうぐつとしめつけて。アイタ、ア、アアいかう衛ないなものぢや。此切株へかう

上り。ひらりと飛んで見せ度けれどそれは己が堪らぬ。何と合點か地くと足を爪立て教へるを。三ぶ後より傳八が兩

足どうど踏落せば。うんとばかりに虚空を掴み七頭八脚目を見出し。手足を煽ち

身を激掻き狂ひ死に死したるは、ッシ心地よくこそ見えにける。地清七も走出でお

ともく。最前の書置に。宛名のないがこれ幸ひ。仲買彌市を殺したを此奴が科にする仕様。三ぶが分別して置いたと。地清七の書置を死骸の傍に直し置き。これでお前に難儀がかうらぬ。夜明けぬ中に一時も。地早うくど釣船が。兩手に若木の花紅葉上キオヒ打連れてこそ三重へ立

第六

男の意地を立てぬいた
焼鐵の女房作

專ドリ賑はしき。難波高津の夏神樂。練込む振込むナオスツン荷ひ込む。地てうさよろさの伊達提燈門の揃へは地下町の。印を見世に伊豫旗。フシ竝ぶ家店の其中に。地釣船の三ぶが内。客は内證預りの乳守の太夫琴浦と。結び合うたる磯之丞見世を揚屋の祭見に。口説しかけて拗合うて炎の煙管打叩き。煙くらへのびんしやんはフシ火皿も湯になるばかりなり。地三ぶが

女房は料理拵へ火鉢にかけし焼物を。燗ぐ片手にコレ梨浦様。地も。う好い加減に仲直つたらよかるがの。道具屋の娘お中殿とやらを三ぶ殿が送つて行たも。情氣辛氣な顔が厭さに。それに何ぞや柴食た様にお前も粹の様にない。男に勤奉公を地さしたと思つたがよいわいなと。挨拶すれば。地アノおつぎ様のいはんす事わいの。お中殿と心中に出た清七男。仲直つたとて面白うもござんせぬ。じたい娘のある内へ奉公にやらんした。九郎兵衛様が聞えませぬ。アコリヤ九郎兵衛に恨いふ氣なら此清七男にいへ。三ぶの世話したたもものも九郎兵衛の頼みから。サ其恩のある人を恨みさするはお前の業。いふなやい。据膳と河豚汁を喰はぬは男の内ではない。ソレ其口が猶憎いと。地せり合ふ中へ主の三ぶ。シ珠數爪繰つて門口より。地女房ども今戻つた。祭の料理出来てあるかと。地内入よきに赤次もほれく。地出来てあるく。誂への鯨の焼物。摺立汁に皮鯨。ヲツトそれで喰へるく。シテ道具屋の娘女は戻して来てか。ハテ人の大事の娘勾引したといはれては。磯殿の男が立たぬ。首くつた傳八めに何もかも負せ金の事もさらりと濟み。仲買の彌市を殺した事は。かの書置してやつたりと思つたが。厭な風説がある。お二人も聞かしやませ。その書置の手が傳八が手でないと。一門共が言出し御詮議を願ふとの噂。スリヤ磯之丞様を大坂の地には置かれまいと。九郎兵衛もいふ俺も思ふ。マア當分立退かす相談というて當途無しにやられもせまい。よつ程な疲癆。マア端近へ出て人に顔見せるも悪い。殊に琴浦殿は目かける奴のある身の上。女房どもも女房ども。何故表へ出しまするぞと。地阿り廻せば

ソレ見さんせの。詞榮耀らしい情氣どころか。事によつたら二年三年別れくにござらも知れぬ。地暇乞と仲直りの汗を一度にかいて置かんせ。うぢくせすと琴浦様連れまして行かんせと。粹な女房の挨拶もよい折口とコレ磯様。いふ事がたんとある。サアござんせと手を取れば。ふいと振り切り不行儀せまい。詞三ぶがきつと見て居やると。地お道化をしほに二人連。手を引。ッ合うて入りにける。地ドリヤ焼物を焼立てて祭進じよと立つ女房。表へ二十六七なッ所目馴れぬ笠の中。地そこ爰かか見廻して。詞下り荷物の世話なさんす。三ぶさんといふ方は。地爰らではないかえと。問ふ門内より爰でござんす。詞どなたぢや。わしぢや。わしとはえ。ヲ、ようござつた。アリヤ徳兵衛のお内儀ぢや。これはしたり。サアマアこちへと。地挨拶を馴染に

打上り。詞三ぶ様には先程九郎兵衛様でお目にかゝり。何かのお禮を申しましたがお前には始めて。私は備中の玉嶋に居りまする辰と申して。徳兵衛女房でござんする。コレハくよう上らんしたな。アイまあ連合徳兵衛殿事は。僅な科で。國を立退かれまして。和泉とやらに居られましたを。皆さん方が世話にして暫く大坂の住居。生れ付きがあらこましい喧嘩といへば一番軀。肌刀差いた様な人。地定めて何角お世話がちと。一體いへばア他がましい何のお禮。詞イヤもうあらこましいは何方にも覺のある事。手前の人も十五六年以前までは。それはく喧嘩好でな。假初にもちよつと橋詰へ出て貰ふが毎日毎晩。それも又直れば直るもの。今では虫も踏殺さぬ佛性。アレあの様に片時も珠數を放さず。腹の立つ事があれば念佛で消して居られます。鳴がいふ通

り常住これぢや。ハテナアそれは結構な事。イヤお内儀徳兵衛も同道で下られますか。サイナア女房の思ふ様にもない聞いて下んせ。お國の咎も赦りて迎ひに來たを。ヤレ嬉しやといふ氣もなうて。マア四五日も跡から下る先へ下れとひつしよなさ。地未練さうに付きはつても居られず。是非なう先へ下りますと。咄の内に三ぶが女房思ひついたる一つの頼み。言出すしほに茶を差出し。詞イヤ申しお辰様。馴々しいがお前へちつとお頼み申したい事がござんす。地何と私に頼まれて下んすまいかと裏問へば。立直つて襟かき合せ。詞玉島の田舎に住んでも一寸徳兵衛女房成でござんす。頼むとあるを一寸でも跡へ寄らぬが夫のしにせ。引きはせまいマアいうて見さんせ。マア忝いお禮から申します。定めて徳兵衛様の咄で聞いて御さんせう。和泉の國濱田

の御家中。玉嶋兵太夫様といふお方の御子息磯之丞様と云ふが。様子あつて町奉公なされてござつた所に。若氣の至りて人を。マア大坂に置かれぬ首尾。今も今とてかけさせます相談。此お方を何卒マア。私か方へ預りましょ。アノ預つて下んすか。そこを引かぬが一寸が女房。殊に其親御の兵太夫様へ釣つてはちつとこつちに由縁もあり。預つて連れまして歸りましょ。そんならさうして下さんせア落着いたく。地テエ呼びまして來ませうと立つを釣船コリヤ待て女房。女賢しうて牛賣られぬと入らざる儂が差配。頼んでよけりや俺が頼む。磯之丞をお辰殿へ預けては此三ぶが顔が立たぬ。サアそこを外へ預けるがあなたのお爲。マダぬかす男の一分捨てさすか。面汚さすか癡呆めと。地呵り飛ばされもちくちく。徳兵衛女房聞咎め。阿イヤ三ぶ様。

無理に頼まれ度うていふではないが。私其人預ればお前の男の立たぬは如何して。但し女でまさかの時役に立たぬと見すゑてか。まんざらひぢりかすりを喰ふ様なアイ女子でもござんせぬ。一旦頼むの頼まれたのと云うたからは。三日でも預からねば私も立たぬぞえ。立てて下んせ親仁さんと。地辛い女房の詞の山椒茶びんあたまを動かする。阿イヤどういうても預けては此三ぶが男が立たぬ。サア其立たぬ譯聞かう。いかさまそれには様子があつる。そりやマアどうして立ちませぬ。ホ立たぬといふ譯は。内儀の顔に色氣がある故。徳兵衛が思はうにも。三ぶといふ者はよい年をして不慮慮な。身に火の付いたが切ないとて。若い女房に若い男を預けてやつたは聞えぬと。思ひはせまいか又思ふまいものでもない。あながち此方に限つて。さうした事はあるまいけれど。分別の外といふ事がある。によつて又疑ふまいものでもないが。ない事ぢやによつて結局戸が立てられぬ。腹立つまいぞや。いつそ此方の顔が歪んであるか半分削けてもあつたら。徳兵衛もなんとも思ふまい又世間も濟む。俺や誓文コレ此珠數にかけ預けたいく。此方の根性を見据ゑたによつて。が萬々が一徳兵衛が立たぬ事が出來ると。俺は勿論九郎兵衛までが。男が廢る。といふ事はあるまいけれど。外といふ字で預けにくい。マアさう思うて下あれと。地事を分けたる一言に連添ふ女房も理に伏し。お辰は元より詞も出す。フシさしうつゝ居たりしが。地何思ひけん立直り火鉢にかけし鐵橋の。火になつたのをおつ取つて。我と我が手に我が顔へ。べつたり當てる燒鐵にうんとばかりに反り返る。これは何故何事と夫

婦は慌て抱きかゝへメステ薬水よと痛はれば。地正氣付きしかむつくと起き。詞なんと三ぶ様。此顔でも分別の外といふ字の色氣があらうかな。出来た。お内儀。磯之丞殿事を頼みます。スリヤ預けて下さんすか。唐までなりと連れ立つて下され。ア、嬉しうござんすそれで私も立つた。磯之丞様の親御兵太夫様は備中の玉島が御生國。徳兵衛殿の爲にも。私が爲にも親方筋。其御子息様を預からいではナ連合の男も立たず。わしも主へ立たぬによつて。親の産付けた満足な顔へ疵付けて預る心。地推量して下さんせと。語るを聞いてお次も涙三ぶも涙の横手を打ち。詞ハテ徳兵衛は頼もしい女房を持つたなア。なせ男には生れてこぬぞ。あつたら物を落してきた。ソレ女房ども。奥へ伴ひ磯殿にも引合せ備中へ下す心持へ。お内儀。疵は痛みはしませぬか。何

のいな我が手にした事。地ヲ恥しと、フシ袖覆ふ。地惜しや盛を散らせしと。三ぶが女房はいたはりて。オッリ一間へへこそは連れて行く。フシ早暮近く。生なれの立てもなし横に出る。男仲間のはね出されこつばの横なまの八。獅子に雇はれ赤頭。フシせんまの形を共儘に。詞三ぶ殿内にか宿にかと。地つき聲やり聲囀り込む。ホ詞こりや二人ながら祭の形。まだ仕舞はずか。飲みに来たのか。今看經しかけて珠數の手が放されぬ。そこらに樽がある一杯せい。南無阿彌陀佛。膳棚に鮎があるぞ。南無阿彌陀佛。地それを看と口ではぶつ。瓜線る珠數と挨拶を取交ぜ後生佛性。此方は牛頭馬頭惡鬼株。膝打叩いて。詞八よ親仁に今の言をかい。ハテぶつ。聞いて居よより言出せ。コレ三ぶ殿。二人が連立つて来たは。こなたに貰ふ物があつて

来た花が欲しい花下はれ。ヤア。何ぢや花をくれい。へエ扱は留守の間へ山車でも持てきたな。ヲ獅子持つて来て美しい花を見付けて置いた。さる侍に頼まれその花を貰ひに来た。ナ八よ。夫々ついで掴んで来て進じようというて。お侍を宮の内待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど。白髪が生えた人をさうもなるまい。但しこみすいうて見る氣か。金にでもする氣かと。地しかける喧嘩を珠數で紛し。詞エ若い者といふものはずはくと嗜め。わいらは住吉で始めて逢うてそれからの出合。もう根性が直つたと思うたが。フム其侍といふは。大鳥佐賀右衛門といふわろであらうがな。ママそんなもの。コリヤ去んで云はうには。琴浦には磯之丞というて。歴とした男がござると去んでいうてくれ。コナ親仁は。俺らを子供の様に思ふさうな。ヲ俺が日

からはいなごの様に思ふ。ドリヤそんなら掴んで去のかと。地立上つて兩人が奥をめがけ駈入る所に。襖さつと押開け脇差提けて三ぶが女房。詞コレ此方の人私やさつきにから聞いて居たが。こな様もろ堪忍がなるまいがの。喚五六年願うた後生を無にして。いつそ斬つて仕舞はざるまい。ヲそんな事もよござんしよ。が。あんまりそれも不便な事でもあり。イヤこんな時斬らざ斬る時もあるまいと。地いふに二人はうぢくきよろく。性根を据ゑて身を固め。詞面白い斬られう。脚腰立たぬ老筆斬りはづさして臺座御光。地しまうてくれうと兩方よりサア斬れくとせがみ立て。ヲシ入身になつて待ちかかれば。地三ぶはすつくり立身になり。詞喉モウ是非がない切つてしまを。ヤそれはイヤ俺が斬るは此球數と。地ふつつり切つて後へ投げ。サア是から

が元の釣船。汝らに刃物がいらうかとはつしと踏倒し尻ひつかからけ。詞ドレ其脇差。ハテもう刃物はいらぬでないか。イヤ此がらくたは爪にも足らぬ。根ざしの侍めをばらして仕舞ふ。男の丸腰も見苦しいと。地大だら腰にぼつ込む所を。どつこいさうはと右左掴み付く腕ぐつと捻上げ。詞喉侍に逢うて來う。地ヲいてごんせとやる女房行く男より氣の強さ。外へ押出し門びつしやり。三ぶは二人を引立て宮のヲシ内へと。連れて行く。ハルツシ奥は暫しの。別れぞと。地琴浦に吞込ませ。ヲシ酒波みかはす折からに。地表へ來るは九郎兵衛が舅三河屋の義平次が。鴉籠釣らして戸をこくと。誰ぢやと云うて開けに出る。詞ホ三ぶ殿の御内室此中は逢ひませぬ。いつ見てもまめさうな。おまへも達者で珍らしい何と思うで。サ年寄ると子に使はれます。九郎兵

衛が云ふには。此中から悪者共が頼まれて。琴浦殿を盗まんとながける。定めて三ぶも心づかひ。四五日此方へ取込んで置いたら。燈臺下暗しと氣が付くまい。女夫の衆の氣休めに。迎うて來いというて鴉籠までおこしました。地これまではいかい世話と取籍へばナンノお禮に及ぶ事。詞今も今とていけず達がわつばさつば。連合は其出入に行かれました。いかさま二三日此家をあらけ。あいつらに鼻あかすも魂膽。九郎兵衛様も其胸で俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡すは慥。奥にぢや呼んで來ませうとつい立入れば義平次は。鴉籠の衆待つて貰はうと。門につつほり人顔のヲシ見えぬを首尾と待ち居たり。地奥は盃取納め伴ひ出でて琴浦が。そんなら私も三ぶ様や九郎兵衛様に譯いふて。跡から行くが合點か。ハテそりや其時私が又迎ひに來ると辰が挨拶。

儀之丞も共々に一時には目立つ故。猶以て連れては行かれぬ鬼角あの衆のいふ様にと。宥めて別れ女郎は駕籠儀とお辰は船場へと。表へ出れば三ぶが女房。平次様渡したぞ。お二人様も御無事でと。長地暇乞も挨拶も互の思ひ暮過ぎて又の便を松屋町。南と北へ引別れ。フシ足早にこそ歩み行く地宮には喧嘩々々と騒ぐうち若い者ども聲々に。高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない。ママ去なれい戻れと。九郎兵衛諸共に三ぶを宥めて歸る店先。女房立つてコレ皆様。地年寄だけで氣遣なと問へば徳兵衛いかなく。昔に變らぬ達者な和郎。八と權とを蓮池へ何の苦も無うどんぶりいはいせ。侍はふけつた。コ、そんなら入らんせ。祝うてわつと酒にせう。コリヤ

第七 男が慥な止め禁れた 紅粉紋の色入帷子

女房氣が付いた。徳兵衛には取分けて内儀の事を咄さにやらぬ。九郎兵衛にも安堵さそ。地サアまあ奥へと先に立つ。どりや内儀の御馳走を食べて去のかと徳兵衛はッ同伴ひ一間へ入りにける。跡に九郎兵衛立留り。お内儀季浦殿や磯殿が見えぬが。何處へぞ行かれたか。さればいなどうやらそぶくいふによつて。お辰さんに預け儀様は備中へやる。琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに來た。ソリヤ誰が。ハテ親仁様が見えて九郎兵衛が云ひます。四五日戻して下されと籠箱まで持たして迎ひにお出。ヤアノ親仁ノ此九郎兵衛がいふというて。舅の親仁か連れて去んだか。ヲイノ。シテノ其駕籠はどつちへ。たしか南の方へ。地それやつてはと耻け出すをコレ待った氣づかひな。御迎ひに來た事おまへは知らずか。知つた知らぬは跡での事。イヤそれ聞かぬ内は。地工面倒なと跳飛ばし。舅の跡を九郎兵衛は息をはかりに三重へ追ひかくる

百舍地神と佛を荷ひ物難し立てたる下寺町。高津宵宮の賑ひに紛れて急ぐ舅義平次。駕籠の簾を細引でぐるぐる巻の俄網。追つ立て行くを跡よりも。政ヲ、イノ呼びかけ飛來る聲の九郎兵衛。百舍南無三寶と横切れに畔道行けば追ひつゞき。政駕籠の棒擱んで畠中どうど打据ゑどつかと坐りッはつと一息つきあへず。コレ申し親仁様。此女中は知つての通りある方からの預り人。それを此方が何處へ連れてござる。こりやてつきりと悪者に頼まれ金にする氣であらうが。さうしられては此九郎兵衛が顔が立たぬ。悪いぞえ。此中も内本町の道具屋で田舎

侍に出立ち。麝香爐を以て五十兩の御事。
 へエ、見下け果てた。重ねて急度と云う
 てからが嗜む心もあるまい。コレ鴉籠の
 衆。大儀ながら其かご地跡へ戻してと昇
 上げさすれば。百合詞コリヤ待て九郎兵衛。
 嗜む心があるまい見下け果てたとは忝
 い。其愛想づかしを待つて居たわい。六
 年以來おれが娘を女房にして。慰み者に
 してゐるサア揚代囉ふ。ヤイ。爰な思知
 らすめ。汝は元宿なし團七というて。粹
 方仲間の小あるき。貰ひ喰ひで暮して居
 つたを引上げて。塚の濱で魚賣させ。ま
 だ其上に娘のおかちをてゝくり。市松と
 いふ子迄へり出さし居つた。月々のあて
 がひ取るがよさに。目を眠つて居る中。
 乳守の町で喧嘩仕出し。和泉の牢へかま
 つて。百日の上女房子を誰が養うたと思
 ふ。致サアそれは皆其許様のお世話。百合
 ぬかさな。せめて其入目を入合はさうと

思つて。儲け事にかゝれば。汝が道具屋
 の内につて。ようぼく上げさしたなア。
 致イヤそれは其場のつい。百合またぬかす
 する氣。致イヤサそれで顔が。百合立た
 ぬか。アノ長々頰を養うてゐた此。此。
 此顔が立たぬか。但し此方の此。此。此



か。今日琴浦をちよろまかして來たのは。頬柑が立たぬかと。地立蹴にはつたと蹴
 惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金に
 られても。致勇は親と無念を堪へ。齒を

喰ひしばり居たりしが。とかく詫びるに
 しくはなしと。揉手の上に膝折り屈め。
 段々の仰せ。一つとして返す詞もござり
 ませぬ。長々のお世話の上又しては金儲
 を妨げ。お腹の立つは御尤。もうふつり
 とお邪魔は致しますまいが。あの女中の
 事計りは。百合イヤならぬ。致サア素手で
 お詫びも申しますまい。友達共が頼母子
 を致してくれまして。爰に三十兩ござり
 ますれば是をお前へ渡しませしよ。身の代
 に取つたと思召し。琴浦殿を三ぶが方へ
 戻して下され。外へやつては此九郎兵衛
 が顔がどうも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢ
 や親仁様。一生の御無心。申し。コレ
 申しと。相手引き袖引き膝を突き無念涙の
 ン男泣き親と。いふ字は是非もなや。百合地
 義平次も三十兩當分取るに少しは柔き。
 詞琴浦をあつちへ渡せば百兩が物儲にあ
 りども。かゝりや繋がる娘の縁。たゞや

つたと思ひ三十兩で戻
 してやろ。ヤコレ駕籠
 の衆。今乗つて来た所
 迄駕籠を戻して。駕籠
 代も存分先で取れいと。
 致増悪氣付くればこん
 な時よ、強請取サアこ
 いと。競ひ勇みの駕籠
 の者、来た道へ又荷
 ひ行く。百合サア約束
 の三十兩受取る。地渡
 せの催促に。致詞イヤ
 其金爰にはござりませ
 ぬ。地宿へ歸つて才覺
 と立たんとするを。百合
 飛びかゝり髪束掴んで
 引仆し。詞エ、腹の立
 つ。くくくくくく。
 うまくくと一ばい。致



附註
 竹本義夫
 夏奈浪の艦
 九段濱

三味線

第一 竹本義夫
 第二 竹本義夫
 第三 竹本義夫
 第四 竹本義夫
 第五 竹本義夫
 第六 竹本義夫
 第七 竹本義夫
 第八 竹本義夫
 第九 竹本義夫

竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫
 竹本義夫

附番の行興座衛兵郎古屋子蛭月七年七曆寶

何の申し左様ではござりませぬ。内へ歸れば心當がまあくく愛を放して。百合ヤアどこへく。うぬが様な賣僧めはかうして腹撥ようか。イヤかうしてくれうかと。地捻廻し。引廻し。踏んだり蹴たり舉句には。砂に摺付け石に打付け引廻し。く。致地引廻されても手向ひのならぬも無念さ口惜しさ。堪へかねれば百合河其面つき何ぢや。肩肘張つて其眼付何ぢや。コリヤヤイ。舅は親。ア、慮外ながら。親に向つて白眼。蹴潰すぞよ。無念なか口惜しいか。ム、泣くか。可愛やなア。擦歪めてやらう。この雪駄の皮喰へと。致地蹴り付けられ商ぎしみ歯ぎり。百合透し眺めて。詞本のりや脇差さいてびこつくか。面白い。斬られう。どこへ跡へ寄りをと。地付け廻して引つ捉へ。御見事此赤鯛でやつて地見るかと持添へ引抜き。サア詞是で斬れく。サ

アく斬らぬかやい。致何の私がお前を。百合イヤ斬る氣であらう。くく。斬られう斬つて貰ふ。一寸斬つたら一尺の竹鋸で挽返す。サア斬つて見よ突いて見よと。地差付け突付け扱取らんくとせり合ふ中。致思はず舅が耳の根すつかり。百合ヤレ人殺しよ親殺しと。地叫はる聲に折よくも。二人祇園囃子の太鼓鉦。致九郎兵衛は殺す氣もないに因果と舅が大聲。百合切つたくと人寄せの。致聲を留めんと又さつぶり。あたりほとりを見廻してうろつく中に百合掴み付き。致横に拂へば又すつばり。人は來ぬかと氣もそじろ。二人松の内行く提燈の。あかりが厭さにどつさりの。音は囃子に。百合地へ紛れても紛れぬ命の終り際。うんと反れば是非なくも取つて抑へて止めの刃。ぐつと差込む其内に間近く聞える御輿の太鼓。死骸を池へ投込みく。ッ血汐を流す枯槁。

地波む水則ち三途八難。我が身にかゝる罪科を洗ひ落せど濁り井の。水より清き夏神樂ちやうさようさの御輿の俄。これ幸。と紛れ込み廻れ出でたる千歳樂。萬歳樂や極樂橋。命の瀬戸の札の辻八町。目へとぞ三重へ紛れ行く

第八

友達に心を碎いた

石割雪路の合印

地日數さへ。ハルケッ早一七日田嶋町魚屋商賣鱈のある。主は團七九郎兵衛とて昔と今の名を合せ。手強き業も五人前高津祭の其夜より。内へ歸りてゆつくりと何知らぬ顔。せぬふりに。人はそれぞれと氣も付かず油断枕の高軒。子は友達と悪あがき切つはつとも親に似て。ッ負けぬ性根ぞ逞しき。且地妻のおかは父親の。敢なき最期常からの。心ゆふとはいひながらオクリ悲しさ。餘り今日も亦。ッ

一寸徳兵衛肩に貫錢くわんせんを引懸けて。詞九郎兵衛内にか。玉嶋へ下る故暇乞に。地ちよつと來たと背笠取つて内に入る。お

墓参りして立歸る。地子供遊びのわやく同士アレ市松の擲たきやつた。私も打たれた切られたと泣くく表へ駈出づれば。おかちはやがて抱きとどめ。詞又こりや市松がせぶらかしたか。堪忍しやく。

エ、憎い奴ぢやの。地私が擲たきかへしてやると宥めすかせば子供共。詞此方の町へ來をつたら寄つてかゝつて縛つてやろと。地口々いひて歸るのもッ物が知らずか氣にかゝる。地汝其口止めてやろと竹提つけて市松が。追つ駈け出づるをおかちは押し止め。詞ヤレこな子よ。杖棒持つてあの子供に。怪我さしたら何とする。眞に親に似ぬ子は鬼子と。九郎兵衛殿の徹とちよう似たなア。祖父様が七日後ある者の覺えはないかと。喚かは毎日御前へ呼ばれ。地心も心ならぬに。いかに子供ぢやというてあんまりな。詞そしてマ

ア父様は。そなたばかりを置いて何處ぞへござつたか。よもやさうでもあるまいが。留守かや。イヤあの屏風の内に父様は寝てぢや。俺は敵討の芝居事してゐたれば彼奴等が。親の敵というて擲たき居つたによつて。祖父様の敵というて擲たき返した。母様祖父様を斬つた奴が知れた俺が殺してやるぞやと。地いふを寝て居る九郎兵衛は。聞くに付けてもハッラッ胸ふさがり是非も。涙にくれ居たる。地おかちは堰せき來る涙を押へ。詞そなたさへそれ程に祖父様の事思やるに。私は常から愛想が盡つき。疊の上ではエ死にはさつしやるまい。ひよんな死をする人と思ふた故。斬つた奴を金輪際こんりんざいとも思はん

だ。思へば私は不孝な者。地悪い人でも親は親。澤山さうに思つたのが今では悔しい。ハッラッ悲しいと口説き。涙の折から。地心の合うた友烏ともからうなきに立寄る

一才徳兵衛肩に貫錢くわんせんを引懸けて。詞九郎兵衛内にか。玉嶋へ下る故暇乞に。地ちよつと來たと背笠取つて内に入る。お

かちはちやつと泣顔隠し。詞ホこりや今下らんすか。暑い時分に大儀な事や。したが日和積ひよりきもよござんしよ。コレくお辰様へよう心得て下さんせ。イヤモウ言傳受取つても死人同然。ついに云うた事がない。ヤ其死人で思ひ出した。親仁を殺した者は未だ知れぬか。サお上にも御詮議ごせんぎが強いけれどまだ知れませぬ。さうであろく。あれが殺して物を取つたといふか。其晩に大きな出入でもあつた

に詮議の手懸りもあらう。あの親仁に意趣ある者といへば。大坂中に残る者がないすりや知れぬ筈。定めて其事で九郎兵衛も心遣こころがひでござらう。推量して下さ

せ。主もほつとしたかして寝てばつかり居られます。どうで斬つた者は知れまい

一才徳兵衛肩に貫錢くわんせんを引懸けて。詞九郎兵衛内にか。玉嶋へ下る故暇乞に。地ちよつと來たと背笠取つて内に入る。お

かちはちやつと泣顔隠し。詞ホこりや今下らんすか。暑い時分に大儀な事や。したが日和積ひよりきもよござんしよ。コレくお辰様へよう心得て下さんせ。イヤモウ言傳受取つても死人同然。ついに云うた事がない。ヤ其死人で思ひ出した。親仁を殺した者は未だ知れぬか。サお上にも御詮議ごせんぎが強いけれどまだ知れませぬ。さうであろく。あれが殺して物を取つたといふか。其晩に大きな出入でもあつた

に詮議の手懸りもあらう。あの親仁に意趣ある者といへば。大坂中に残る者がないすりや知れぬ筈。定めて其事で九郎兵衛も心遣こころがひでござらう。推量して下さ

せ。主もほつとしたかして寝てばつかり居られます。どうで斬つた者は知れまい

一才徳兵衛肩に貫錢くわんせんを引懸けて。詞九郎兵衛内にか。玉嶋へ下る故暇乞に。地ちよつと來たと背笠取つて内に入る。お

かちはちやつと泣顔隠し。詞ホこりや今下らんすか。暑い時分に大儀な事や。したが日和積ひよりきもよござんしよ。コレくお辰様へよう心得て下さんせ。イヤモウ言傳受取つても死人同然。ついに云うた事がない。ヤ其死人で思ひ出した。親仁を殺した者は未だ知れぬか。サお上にも御詮議ごせんぎが強いけれどまだ知れませぬ。さうであろく。あれが殺して物を取つたといふか。其晩に大きな出入でもあつた

に詮議の手懸りもあらう。あの親仁に意趣ある者といへば。大坂中に残る者がないすりや知れぬ筈。定めて其事で九郎兵衛も心遣こころがひでござらう。推量して下さ

せ。主もほつとしたかして寝てばつかり居られます。どうで斬つた者は知れまい

し地ぢいとしや大死でござんしよ調アレ又泣かしやる。犬死でも馬死でも時刻じこくぢやく。モウ諦あきらめたがよいわいの。俺も九郎兵衛にちよつと逢うて行きたいものぢやが。ほんに起しませう。アコレくもろよござるわ。可愛さうによう寝て居るものを。イヤ又後あとであらられましょ。地ぢノレ市松起しましやと。いふに立寄り屏風押明け。調コレ父様。伯父様が逢ひにきてぢや。コレノウこれなうと。地ぢゆすり起され目を擦りく。調伯父様とは。エ徳兵衛か。旗立の装まにでも乗るのか。ハレ起さすと置きはせいで。ヤ此間の取込みで無草臥であらう。推量してたも調。舅い太夫が悪い死をしられた故。ア、フ、身中がぶきくいふ程草臥れた。ヲ道理道理。イヤモウ主まのだいい氣き抜ひわしにかゝつて。ハテそりや其筈の事。舅は親。九郎兵衛が世話仕内の事。したがそんな事は

いかう氣きが採とめる物ぢや。何と氣休きやすめにいつそ俺と連立つて下へ行きやらぬか。イヤ何なにのいの。ハテさうでないぞや。そんなもやくした事のあつた上では。必ず大煩おほが出るもの。俺がいふ様におぢや下へ行いこ。何をやくたいもない備び中ちゆう三さん界がい何なにしに行く物で。イヤまんざら用がないでもあるまい。俺が女房に礮か之承しやう殿でんを預けて遣つたれば。見舞みまがてら下つても大事あるまい。ホ顔かほに焼鐵やうてつ迄き當あたてて預つて去んだ内儀。覺束かくすくなさうに見舞みまにも行かれまい。コレそりや大事ない。イヤ殊ことに俺は海船かいせんは嫌きらひぢや。板一枚下は地獄。今年こゝねは取分け川船かわふねさへ怪我けがするに。海上かいじやうは俺おれや脈みやくぢや怖おそい。ムウスリヤあり様は海船かいせんが怖おそいか。アノ海船かいせんが。ハ、ハ、ハ、ハ、こりやをかしい。イヤこりや怖おそかる。道理道理ぢやく。ハテ人といふ物は見かけに

九郎兵衛は男ぢやによつて命いのちが惜おししい。大恩受けた兵太夫殿べいどうでんがよそながら。頼たのむといはれた一言。礮か之承しやう殿でんの歸かへ參まが叶かなひ。親御おんがみの手へ渡す迄までは大事の命。サア其大事の命いのちぢやによつて。かの大煩おほの起おこらぬ中に下りやらぬかといふ事。ナウお内儀うちぎさうでござんすとも。主まが煩わづらはれますと。私わがや市松いちそうが狼狽ろうたへまする。こりや徳兵衛とくべいゑ様のいはんす通りに。何ぬかす。大坂おさかを放はなれては和泉わいづみの様子。礮か之承しやう殿でんの歸かへ參まの程ほどが知れぬ。女の出過ぎたすつこんでつけかれと。地ぢ呵あり飛ばせば徳兵衛引つ取り。ア調コレお内儀。地ぢお茶一つ下されと茶ちやで紛まらかす主の機嫌。アイと返事を立たつしほの。常の辛かいを呑の込んで。アシ勝手かたへこそは汲くみに行く。地ぢ徳兵衛重ねてあたりを眺ながめ。舅いが最期さいごの場ばにありし雪ゆき踏ふ片かた足腰あしこしより出でし。調コレ此山形こゝのやまがたに丸印まるいんの雪踏ゆきふ。地ぢ見知りがあるかと差出さしだす。ぎ

よつとせしが。コレは俺が雪踏。それが又何とぞしたか。サア是がそなたの雪踏ぢやによつて。下へ行きやらぬかといふ事。ムウそれが又俺が雪踏なれば。何で下へ行く事ぞ。イヤコレ九郎兵衛。此雪踏を味な所で拾うたの。長町裏の畠中で。ぢやによつて下へ行きやらいでといふ事。ムウイヤ其雪踏は。此中練物見よろと思ひ。小間物屋店へ上つたれば片足犬に取られた。定めてそれを畠中へ衝へて行た物である。仰々しい何ぞ事もある様にと。地けんもほろゝに顔色もフシ人を殺せし體もなし。地徳兵衛は目も潤み流るゝ汗と俱に拭き取り。へエ、聞えぬぞや九郎兵衛。詞そなたとは住吉で。腕引く代ちや片腕ぢやと取交した片袖。おりや大事にかけて持つて居るぞや。有様は雑巾にがなしたである。これまで兄弟同然に心底あかす友達中。なぜ物を隠して

たもる。其方には市松といふ子もある。しかもいたいけ盛り。伯父様〜といへば。追従でないおれも不便な。もしもの事があつたらば女房子迄引出され。どんな憂目に逢ふも知れず。其方一人の命は三人にかゝると思ひ。コレこれを見や。俺が雪踏も山形に丸印。片足見えぬがお上へまはり詮議の種になつた時。この徳兵衛でござると身に引受ける覺悟。地これ程までに思ふ俺に。隠し包みは曲がない。なぜ明かして共々に相談してたもらぬ。但しこの徳兵衛が性根魂が氣遣な。肥叩くと思つていはぬか。そりやあんまり聞えぬ。詞おれも男ぢや。〜。〜。〜と。地肩振りいがめ眩張つて。親の時さへ泣かぬ目に恨の涙。エエチはら〜とフシ保ち。兼ねたる殊勝さよ。地九郎兵衛も身の大事飛忽にも明かされず差俯いて居たりしが。詞段々の志。悪うは受け

ぬ過分な〜。さういやれば其雪踏が悪い所にあつた物でがなある。マアよう思つて見や。泣くと喰はうといふ子はあり。女房は若し。身を仕舞ふ様な事仕出してよい物か。サアそこがあるによつて。身に引受ける覺悟の雪踏。サア其引受けさして。見て居るやうな九郎兵衛でもないわいの。元より身に覺えのない事。必ず氣遣ひせずともう船も出る時分。早う下つて磯殿の事世話してたも。それが眞の命を貰うた同然。スリヤどういうても明していはぬの。ハテ何にもいふ事はないてや。日のたけぬ中早う行きや。地俺も見された夢見ると。入らんとするを思ひがけなく。詞九郎兵衛取つたと地聲かくる。はつと目を据ゑ見廻し〜。詞徳兵衛何ぢや。何を取つた。イヤ今爰で蚤を取つた。ハテ仰山な。コレ見や〜。蚤といふ物は熱な物ぢや。忽ち命を取ら

るゝ事を知らないで。骸の内を。ノウコレ内を得放れぬ。なんは飛ぶ程の術を得ても。天下の息のかゝつた此指で。ドウ押へられては叶はぬ。捉へられぬ内に此蜜も高飛し居つたらよかつたにナウ九郎兵衛。何をいふやらきよろしく。其蜜もちつと縫目の内に居れば。捉へられる事もない。なま中にうちついて飛びあるく故押へられた。それも又其蜜に。コレ此劍の様な針があると。切つてく切拂ひ。唐天竺へも一飛び。一寸の虫にも五分の魂。一寸の虫にも。な。徳兵衛。其中逢はう。増オクリさらば。く。と。フシいうてぞ入りにける。地茶を入れかへて女房が。持ち出る此方は捨扶持で。去にかけるのをコレ茶を一つまゐらぬか。端香一つとフシ差出す。詞イヤモウ茶も水もアお内儀面白うごんせぬ。我等が志水の泡となつたぢや。せめて此方など悦

んで下んせ。ヲ、何ぢや知らぬが。常からお前の志私や嬉しう思うて居るわいな。ハテ九郎兵衛と懇するも。塚の戎島で此方様と出合うてからふつと其時。テモあの女房は可愛らしい。それも何の役に立たぬ事であつた。地ハケッテ去んで来まじよと立出づる。詞アこれ徳兵衛様。ソレお前の帷子は。何處も彼處も綻びて裾廻りがばらばら。地それ著て船へは乗れまいといふに身内をほんになア。詞綻びた所を括つて置いたが皆ほどけた。一針やつて下んせぬか。ヲ易い事ぢやつと脱がんせ。イヤつかうして。ヲ辛氣。さうしてそれが縫はれるものか。デモ内證北國ぢや。ム、自慢で加賀の下帯か。地イヤ其隣の越中ぢやと。袖無し繻絆一つになり。脱いで渡せば針刺しのオクリ糸の。結ばれフシ縁の端。もつれかゝるやサハリ咽の下。穴のあく程顔打眺め。詞いつ見

てもく美しい御面相。九郎兵衛が大坂を離れぬも道理。憎い程鬨がある。地ヲ何ぢやいのじやらく。と。國へ去んでお辰様にさういうて悦ばさんせ。詞イヤモウそけめが頬は見たうもない。下地の杓子に燧鐵で。革足袋の焦けた様な。地デモ久しぶりですつぽりと面白かる。詞ムウ面白けりや何とぞ思ふ氣か。アノ爰なすつとの皮めが。ヲ何さんす痛いわいな。何の痛かる。おりや此方の綻べた所が縫うてやりたい。コレ悪い事さんすと針で突くぞ。ア、危い。地エ卑怯な男ではあると。フシカリ悪戯高じる其中には。表へは釣船の三ぶが来かゝり内よりは。夫が outbreak して見るとも知らず。詞有りやうは九郎兵衛を下へ下した跡での事と。思うたが圖へいかぬ。ソレ戎島で頼んだ時の約束。サア其時はさう思うたけれど。地けれど濟むかと抱付くを。九郎兵衛

飛出で取つて引退け。女房が持つたる帷子挽取つて。どうど打付け中にすつくり。ハツトおかは氣も上り。徳兵衛はうぢくくもぢくく。そつとッ帷子引取つて。

ハッ著る中もまだへらず口。ア、去んでくりよく。大坂に居たとて花賞の咲く事もあるまい。ア、去んで女房の顔など見て楽しもうわい。エ、疾うに船に乗るものを。あた鈍臭い。続へつ縫うて貰ふで帯解いた。俺が著る物俺がでに俺が著るから俺次第ぢやと。ッ減多無しに帯引廻し。船が遅なる去んでくれうと行かんとするをコリヤ待て徳兵衛。アとつくりと帯しめて。そこへ直れと聲かけられ。進行くも行かれぬの際。破れかぶれと性根を据ゑ。何ぢや用があるか九郎兵衛。内儀との事ならぐづくくいふに及ばぬ。疾うから俺が惚れてるれども。友達の義理を思ひ齒節へも出

さなんだ。時節もあらうものぢや。其方から隔てる様になつて今では義理も瓢箪もない。サアいつそ内儀をおれにくれるか。さもなくば胸にある事そこへまき出せ。ホ、ホ、頼もしさうにいふと思つたが。女房欲しがる根性で様子がさらりと知れた。欲しか女房もやらう。聞きたり大事もいうて聞かさう。見事われ聞いたり貰うたりせよ。ハテ二色共に望んだ事聞いたり貰うたりせうわい。ヲやる。ヲもらを。云をわい。聞こわい。サア。サア。地さあ来いと身拵する表にも。三ぶも身構まさかの時走り込まんとッ控へる。女房おかははあ〜と氣を揉みあせれど女衆何とせんかたなき内に。九郎兵衛は袂より。取りかはしたる片袖出しす々に引裂けば。徳兵衛も持合せ共に引裂き一度に投付け。互の固を破つたからは心は残らぬ。ヲそれく。

サア出い。地出いとコリヤ抜き出で。すつと立寄り額と額。目先三寸肩先四寸。ぢつと體を小疊に。た〜んで互に。ナメスッ膝摺合ひ。思へばちつとの間の懇であつたなア徳兵衛。ヲ是迄はいかい世話。ソリヤ互に。サア貰ひかけうか。どうして貰ふ。ヲまづかうしてと切りかける。丁ど受止め受流しばつし〜と討合ふ刃音。コレ待つてと女房が支へる中に三ぶは駈入り。コリヤ待て〜と制しても。地逸り切つたる二人が勢。どつこいさせぬはこりやさせぬと。彼方を突退け此方をッ跳ねしてこい止めたと支へたり。アヤ邪魔せまい危い〜。地怪我せぬ中に退かかれと引退けても駈入り〜。コリヤ斬れ〜堪忍ならさ俺を斬れ。サア此三ぶを斬れ〜。コリヤ。コリヤ。斬れ〜と。地胸打叩き膝叩き抜身をびくとも思はねども。思ひ切

我が身にも。地 大事抱へて是しきに命を
果す様なしと。ハッラ傍に立つて。硯箱。
さら／＼とッ書認め。詞コレ三ぶ

殿。此方を立てて何にもいはぬ。地 それ
渡して下されと書いた一通交付けて。ッ
一間へこそは入りにけり。地 女房取上げ
開き見て。ヤア詞こりや去狀暇の狀ハ
はつと。ヌメ計りに泣き沈む。地 三ぶは
突立ち何めろ／＼。詞 覚えがあらうが有
るまいが此家に置かれず立つた／＼と。
引立てられて。地 ナウ悲しや。せめて別
れに市松に。一目合せ下さんせ。市松
何處にちや市松と呼ぶ聲慕ひ走り来る。
ヤア面倒なと突退け／＼。詞一寸には此
三ぶが相手になつて存分いふ。地 サア來
いうせいと片手におかち。片手に徳兵衛
引立てて。詞九郎兵衛見てか。腹癒に類
恥かゝして先つかうと。門へ投出し跡ひ
つしやり。地 ナウコレ母様々々と駈出づ

る市松引つ捉へ。詞 畜生の親慕ふからは。
此奴が性根も見えた／＼。九郎兵衛がた
めには猶足手纏ひ。犬の母めと一所にう
せい。地 父親とは縁切つたと共に突出し
フシ口引閉め。詞 何と九郎兵衛腹が癒た
か。其代り俺は草臥れた。地 いつそ爰に
寐て去のと。我が身を横にやつころり。
フシ肘を枕の一體み。ハッラ表に親子は。泣
仆れ。徳兵衛も、フシ打萎れ暫し。詞もな
かりしが。地 思ひ合つたか三人がぢつと
顔上げ、フシあたりを眺め三ぶがそろ／＼
立寄る戸口。表におかちは涙聲。ナウ詞
三ぶ様。徳兵衛様。お前方のいはんす通
りに。連合を騙し暇の狀を取つたれば男
は親。九郎兵衛殿は親殺しに。地 なりは
せぬかと。ッシどうと伏し前後。不覺に取
亂す。ニリ地 三ぶもせきくる涙を押へ。詞
男は親。掣は子。親殺しになつた時は市松
と此方が。竹鋸でひかねばならぬ。それ

が悲しいばかりに徳兵衛に不義しかけ
させ。俺も共々口叩き。暇の狀を書かし
ました。此上に捕へられ殺さるとも一思
ひ。他人同士の喧嘩になつて。苦しい死
はせぬではあるが。今日や顯れ捕へに來
るか。明日や縄目に及ぶかと。案じて夜
の目も合ひませぬ。こんな氣ではなかつ
たが。エ、年寄つたれば心まで。地 たゞ
の親父になりましたとしゃくり上ぐれば
徳兵衛も。詞 どうぞ備中へ連れて行くか。
明していはゞ去狀も。相談ついで書かさ
うと。思うて問へど根深う隠す。戦法盡
きていひ合せた通り。心に思はぬ不義淫
奔。さぞ腹が立と。憎からう。どうした
縁か。兄弟より親しうしてたもつた人に。
人でなしと思はるゝおれも因果。内儀も
因果。地 因果、フシ同士の寄り集り。地 成
程さうでござんすとも。取分け女子は去
られまい。隙取るまいとする筈を。愛想

づかしは九郎兵衛殿。皆こなさんの爲ちやぞや。コレ市松もよう聞いてたも。わしは親を殺されても。情いとも聞えぬとも。思ふ心は微塵もない。地よく／＼腹の立つ事があつての事と思へども。情ないはお上の咎。詞今日も御前でお代官様が。コリヤ氣遣ひするな。今の間に詮議仕出して下手人を。取つてやるぞと仰しやつた。其時の私が悲しさ。泣いてばつかり居たれば。お町衆が腰押ししてソレ有難いとお禮申せ。お禮申せとせり立てられ。地連添ふ夫を殺すとあるを。有難うござりますると。いうた時の其苦しさ。死なれるものなら其場で直に。死にたかつたとせき上げて敷けば立聞く九郎兵衛が。胸に磐石熱鐵を。呑むよりつらき血の涙。妻の心。三ぶが情。徳兵衛が實氣をも。聞いて遙にハッ手合せ泣いて。禮いふばかりなり。地盡きぬ敷きと三ぶは手

取り。詞此方が此家に居ては。夫婦の縁の切れぬも同然。萬一の時言譯も喧まし。とかく九郎兵衛が親殺しにならぬ様。地夫に名残も惜しかりけれど。俺が所へサアござれと。引立てられておからは猶しやくり上げく。敷けば共に市松が。詞母様どこへ行く事いや。悪い事もしますまい。父様と一所に地内に居て下されと。続れば思はず聲上げてわつとばかりに取亂す。三ぶも徳兵衛も諸共に。ヲ道理ぢや／＼。ヲ道理々々と泣沈む。ハッ手罪科通れぬ。天の網四方を取巻く人聲足音。徳兵衛はつと三ぶも悔り。詞コリヤ泣いて居る所でない。アレ／＼捕手と見えて大勢の人聲。地まつ九郎兵衛を落さうか裏表を閉めうかと。騒ぎ廻れば女房も市松連れて氣もそどう。徳兵衛思案し。詞暫しの間は隙だらん。其間に早落したく。地合點がてんと釣船は。親子の者を引連れて、シ奥へ行く間に程なく。地所の代官捕手の大勢ばら／＼と亂れ入り。詞九郎兵衛はいづくにをる。舅義平次を殺したる科明白に顯れたり。是へ出よと呼ばはつたり。地徳兵衛やがて差出で。詞コハ思ひよらぬ仰せ。それには何ぞ慥な證據。ヤアぬかすまい。其節泥の中に。山形に丸印の雪踏片足残りあつたを。段々詮議をすれば九郎兵衛が雪踏なる由。遁れぬ所是へ出せと。地仰せの中より。イヤ其印は私とてもかくの通りとぬいで見れば。イヤサ詞そればかりでない。義平次九郎兵衛喧嘩の場所より。女を乗せたる駕籠の者。立歸るふりにて見届けたと只今役所へ訴へ。地何とそれでも諍ふかと退引ならぬ訴人に。言句も出でず赤面しながら。詞さほど慥な證據ござれば九郎兵衛は科人。しかし。荒立てては中々お手に廻りますま

い。私に仰付けられませうならば。騙し
捕りに捕つて上げませう。地それともお
疑ひあらば、ッ御勝手次第と言放せば。
ヨ聞及んだる強力者迂濶には踏込まれ
ず。地其方も共々にお上の奉公働けと。
言付けて奥に目を付け。ヤア御裏道へ行
くが儲に九郎兵衛。地それ逃すなと大勢
がッ捕つたくと亂れ入る。地ハツト徳
兵衛見やる中三ぶは妻子を引つ抱へ。走
出でてモウ叶はぬ。地もし此市松を擒にし
られては。氣がおくれて九郎兵衛が思ふ
様に働きなるとまい。地親子の者を何方へ
ぞ預けて来る中跡を頼む。合點ちやござ
れと三人を見送る中に奥の騒動。地それ
く九郎兵衛が屋根へ逃げたぞ。突いて
捕れ巻いて捕れ。地突棒よ刺又よと騒ぎ
につれて徳兵衛も。何とせんかと思ひ廻
して表へ駆出で。梯子追つ取りおだれに
打掛け。登るも心板屋重ね重ぬる。三重

へ身の科も。地爰ぞ絶體絶命と。九郎兵
衛は屋根の上力士の如く拔身を提げ。ッ
寄らば斬らんづ其勢。地ノリ捕手の人数は
後より駆上つて右左。捕つたとかゝるを
唐竹梨割車切はらりくと薙倒す。地徳
兵衛が捕繩は擔けて来る路錢の貫さし。
手繰つて向うへ立廻り。地ヤア卑怯なり
九郎兵衛。とても遁れぬ身の大罪。尋常
に繩かゝれと高聲に呼ばはれば。ホ、徳
兵衛か逢ひたかつた。何かの様子は皆聞
いた。コリヤ何にもいはぬ。禮もいはぬ。
サアならば随分捕つて見よ。ヲ捕つて見
しよこりや捕つたと。地貫さし肩へ打ち
かけて。落ちよ逃げよと突きやり振ち合
ふ屋根の上。踏みぬくばかりめりく
く。地どっこいさせぬ。こりやさせぬ
と。拔身を取つたり取られたり。地下に
は捕手が取りまいて落ちば括らん手早
細。一足突きやり二足歩み。地遁れば綱

んで引戻し。又駆け行くも七足八足。地
十足の貫さし首に懸けさせせり合ひ行く
も角屋敷。横町こして隣町。下は隠居の
座敷前なき所へコリヤ爰で。捕つたは
やいと九郎兵衛を。おだれの上より突落
し。地コリヤく落着く所は備中の玉島
合點か。地合點ちや過分と九郎兵衛は
キオヒ飛ぶが如くに三坂へ遁れ行く

第九

親と子の縁を繋いだ。
貫さしの捕繩

地名物は刃物焼唐海月。備前備中兩國
で骨といはれし一寸徳兵衛。命にかけて
九郎兵衛を隠し遂ければ今日も亦。庄屋
代官の呼使は是非なく行つて留守の内。
地飛脚と思しき撥鬘男門口より聲高に。
一寸屋の徳兵衛殿は爰かの。大坂から
來ましたと地踏込む足も草鞋がけ。お辰
は駆出で是はく。地遠々の所ようこそ
ようこそ。シテ大坂は何處。地どなたと

問へば男はあたりを見返し。詞大坂は高津町釣船の三ぶ殿からの使。夫婦ともいはるゝには。永々九郎兵衛殿を匿まうて下はつて過分にえんす。したが此間はその邊へもづきが廻り。ごろつくと聞いたによつて。九郎兵衛殿を迎ひにやります。此者と連れもつて戻してくつさんせと。

地いへてえんすと常言付けぬ口上を。フ言廻はすれば。地目高な女房打額いて成程々々。詞則ち隣の明家に忍ばして置きました。地連れまして去んで下さんせ。大儀ながらと頼むに幸ひ。詞そんなら釣船も待つて居る筈。連立つて去にましょ。隣の明家はドレどこと。門口出るを跡ひつしやり鑿かけて。詞コレ大坂飛脚おいて貰はう。此國の御詮議は昨夜からのもめ出し。それが聞えて迎ひに来たとは。アノ五十里隔てた大坂へ鳥が觸れたか風がいうたか。もとより此方に匿まはねば

構はぬ事。地ちやが都合が悪い出かけ直してござんせと。すつかりいはされ飛脚はきよより。フ立ちはだかつて居る所へ。地どうぢやく／＼様子はどうかちやと尋ね寄るはなまの八。詞ア、失敗つてのけて様子は知れぬ。あの體ならば九郎兵衛は此内に居らぬであろ。ナ。ナ。地と耳に口寄せ。詞コレかうぢやによつて居らぬであろ。頼まれた佐賀右衛門殿へ申上げ。濱邊の方を詮議せうと。地いうては嘸き額き合ひフシ何處ともなく立歸る。地様子を立聞きお辰は安堵。詞搦こそ飛脚は廻し者徳兵衛殿の内になら。地鼻削いで去なさうにと。いひつゝ立寄り戸棚を叩き。詞九郎兵衛様今の飛脚は廻し者。お前をかうした所に忍ばして置きますも。あんな事もあらうかと主の利勘。地ちつとの間暢氣させましょかと。錠押明くれば戸を開き。手足を伸して圍七九郎兵衛。

詞テモだるやく／＼窮屈や。起きればつかへる寐ればすくばる。疊提燈のやうになつて。足も腰もめり／＼。ア、退屈な事。おか様。磯之丞殿は何所ぞへぞ行かれましたか。アイ出の口の小座敷に本讀んでござんする。ア又氣がつけうが。最前来た飛脚めは慥か。こつばの權めが聲ぢやが。アそんな事でもごんしょかえ。佐賀右衛門に頼まれ喚き歩くと見えた。あいつらに恐れこんな窮屈な目して居よより。早う名乗つて出て仕舞がつきたい。ア、又そんな事いはずさかいな。磯之丞様の先途を見届けさせんと。連合徳兵衛殿の心遣ひそれを無にして早う死にたいか。イヤサそればかりで九郎兵衛程の者が逃げ隠れる。殊に徳兵衛の志破るは。人でも杖でもないと堪へては居れども。最前の様な赤犬めがうせる。飛出て骨がひしぎ度なる。これが私が病

でえす。コレそんな時にはな。大坂に居
やんすおかち様や。市松の事思ひ出した
がよいわいなと。地いはれて又も故郷の
事。スエ思ひ出する折からに。地表へ歸
る主の徳兵衛。詞こりや何で門口閉めた
と地いひつゝしやくる潛戸の。音に驚き
そりや又人よと九郎兵衛を。無理に戸棚
へ押入れて。錠下す音蔽く音紛れてヲイ
と答さへ。ッ聲どまかれて明けに出る。
詞ハテ扱。晝中に閉めて置くと猶人が不
思議立てる。犬い阿房ではあるわいのと。
地いひつゝ入ればさればいな。詞こな様の
留守の内。大坂からぢや。いうて赤犬が
来てな。ソリヤこつばの櫓めである。ム
ウ知つてかえ。ヲ、サ今日代官所で様子
を聞けば。大坂表より九郎兵衛が生國和
泉の國へ訴あつて。大島佐賀右衛門とい
ふ奴。詮議に下りしとの噂。こいつ根深
い悪者。犬に犬を入れて嗅き歩かすと聞

いた。縦へ一家であらうが。女房子であ
らうが。肌の赦されぬ時節。礮之丞殿も内
にのやるか。地出歩かぬ様にいへと心
を。ッ付ける折からに。地所目馴れぬ侍
の編笠取つて内に入り。詞卒爾ながらお
身が此家の亭主。一寸徳兵衛といふので
あらう。身共は泉州濱田の家中。介松主
計といふ者。初對面でおぢやる。地赦し
めされと座を占むれば。お辰はきよろ
く徳兵衛は。聞及んだる名苗字に上足
下し座を下り。詞成程拙者が一寸徳兵衛。
珍しきお尋ね何の御用と手をつけば。外
の儀でもない。此家に玉嶋兵太夫子息。
礮之丞がお居やるであらう。迎に參つた
逢せておくりやれ。これは思ひ寄りぬ仰。
シテ御迎の筋は。善でござりまするか悪
でござりまするか。ヲ、サ悪ともく。
礮之丞には盜賊といふ御不審が立つた。
エそりや又どうしてくと。女房諸共仰

天すれば。戸棚の内にも身を採む音。一間
に立聞く礮之丞堪へ兼ねて飛んで出で。
詞お久しや主計殿。シテ此礮之丞を盜賊と
は何を以ておつしやる。御返答によつて
浪人の切れ味。お目にかけると切刃を廻
し急ぎに急いで詰めかくれば。ホヲまだ
侍の性根残つて珍重々々。盜賊の筋は御
自分。國方でお預りの。千手院力王のお
刀お藏の内に紛失。ヒヤア。大島佐賀
右衛門申上げるには。礮之丞が殿のお刀
を盗んで賣代なし。傾城を受出したと悪
説を言出し。お耳に入つて親兵太夫殿は
物頭へお預け。拙者には御自分の有所を
尋ね。急度詮議を糺せよと御上意。よも
や左様な不所存はあるまいなれども一生
懸命。地サア返答あれといひかけられ。
ハツト當惑さしもの徳兵衛。礮之丞は猶
赤面の覺えなき身の氣はうろく。ッせ
んかた。盡きて切腹と。脇差抜くをお辰は

押し止め。詞コレお前は狼狽へてか。但しお身に覚えがあるか。言譯なされ言譯をと。地あせれば無念の齒を噛みしめ。詞わが傾城狂ひももと佐賀右衛門めがすめ。地とはいへ今更侍の武具馬具を代なして。身請したと言譯がどうなるものぞお内儀。これ皆お主と親の罰。思ひ知つての切腹と挽ぎ放すを主計は聲かけ。詞ヤア覚えなき身が切腹して。親迄恥辱を與へるか。地一句で止められ死もならず。ハツトッぱかりに忍び泣く心を察し。ホヲ詞兎角力王のお刀。尋ね出すが身の言譯。まづそれ迄は貴殿は科人。其儘には差置かれず。イヤ旅宿へ同道致さん。お立あれと引立てられ。地是非なくすごくッ立出づるを。地徳兵衛立寄り挽ぎ離し。詞コレお侍様。此儀之丞殿は手前の客人。詮議があらば此場でなされ。旅宿へやる事なませぬと。地強ばかりか

れば柔を入れ。詞ホ尤もさりながら。詮議を遂ぐるは胡亂の沙汰。儀之丞殿限りよもや左様不所存は。サ無いと思はど同道御無用。イヤサ。そこが主命。一旦御不審かゝりし者。見遁し置いてはお上へ不忠。イヤそりやそつちの御勝手ばかり。友達どもより預つた若い人に無賃をいひかけ。其證明の立つ迄と連立つて貰うては。マ、此徳兵衛が男が立たぬ。サアそこが了簡。お身は高が町人。身共は武士サ。其武士ちやによつて猶ならぬ。何故々々。徳兵衛が町人が百姓ならば渡しませまい。小見すもいはうが相手が侍。ちやによつて預つた人を渡した。刀が怖さといはれては。此男一生が廢る。それとも是非受取つて歸りたくば。コレ此首と一所に。ハテ一度死んで二度死なんと。地臺座据ゑたる大胡座命を塵と。ッ投出した。地流石の主計も道理には。當てる

刃の刃金もなまり。エネテ暫し。思案し差したる刀鞘とも投出し。詞コレ徳兵衛。ハテ其方は性根魂の据りし男。見込んで武士の一腰を預ける。コレ差添ばかりになつたれば身は町人。何と町人ぢやが。儀之丞を預けくれまいか。ムウすりや此一腰を。ハテ刀に恐れぬ其方が言譯。シタリ。御勝手に連れましてござりませ。スリヤ得心の召さつたの。ソレ女房ども日が暮れさうな小提燈でも上げませい。イヤそれには及ばぬ。地過分々々とハルッ引連れ出づれば門まで見送り。詞申しお侍様。ちと御無心がござりまする。何かく。さる方から頼まれました。アノ此刀お買ひなされて下さりませ。ハテ此刀は其方へ。イヤ代物には儀之丞様の。お力になつて地下さりませとッ渡す心のしをらしさ。地いかな武士でもほろりと折れ。詞氣遣ひ召されな請取つたと。地あいた

腰をば差ぎ行く。互の心丸鏢の。金の目貫に銀の縁。よい拵への鞆持と、オクリ頼みて。へこそは別れ行く。ハルツシ黄昏過ぎと。ほくくと女子供を引連れて。儲か爰らと釣船は門口そとエ爰ぢや。九郎兵衛の女房や息子の市松連れて下つた。徳兵衛マア悦びや。磯之丞殿がずかとやられた。かの仲買の彌市めは根がお尋ね者で。傳八が書置の手が違うたも何にもなしに。さらりつと事が済む。小道具屋の孫右衛門殿の悦び。娘のお中と琴浦殿とを兄弟分にして。磯殿の出世を待つて居らるゝ。また此二人も何やかやで連れて下つた。おか様まめにあつたのと。地取りませ咄せば女房お辰。コレマアよう連れまして下らんした。おかし様市松殿も大きく成つて。ヤレク久しや珍しや。地サアマアこちへと摺揆も、ステ身につく様に思はれて。詞ほんにマア何

からお禮申しませうやら。連合九郎兵衛殿のお世話。詞では言盡されませぬ。そしてマアいよくまで居られますかな。まめなどもくマアちよつと逢はせませうと。地立つを徳兵衛コリヤ待て女房。詞逢はすとは誰にあはす。ハテ九郎コリヤ九郎兵衛は北國へ下つて爰には居ぬが。エイやや假令居るにもせよ。一旦隙やつた女房に逢ふ様な未練者でない。元より此内には居ぬ。ナ居ぬ。いぬといふに氣を付けよと。地呵り廻せばお辰も氣が付き。詞ほんに私とした事が魚相々々。天に口とやらいへばナウ徳兵衛殿。それがすぐに壁に耳。ソレイナ。何にもいはれぬおかし様。アレあの戸棚の物いふ世の中ぢやわいなア。エそんならあの戸棚。コレ内儀デモ逢ふ事はならぬ此所には居ぬと。地いはれておかしは逢々と逢ひに下りしかひもなく、ステ涙も。胸に迫りし

が。地縁を切つたは表向心の縁は切らねども。去り狀取つたが誤なら。詞成程わたしは逢ひますまい。其代りに市松に逢つてやつて下さんせ。主も定めて逢ひたかろ。顔見せて下さんせ。お世話の上のお情と。歎けば三ふも、ッシをれながら。詞アレあの通りに常住泣いて居らるゝ。内儀はまだ得心もさせよいが。難儀をするは此坊主め。父様に逢ひたいくと泣いてばかり居つて。此間は物も得喰ひ居らぬ。あんまり見る目が痛々しうて跡先思はず連れて下つた。内儀に逢はず事ならず。此奴ばかりに逢うてやつたもらぬか。ア、コレらつちもない。此方までが同じ様に。その逢ひたい見たいを堪へるが。天の實網の代りに辛抱さしたがい。イヤ徳兵衛。もう天の網がかみつたわいの。ソリヤどうして。地コレは見てもと市松が肌を脱がせば懐手鏡。ヒ

ヤアこりや忤に手枷か。いとしや此子を
下手人か。お辰が泣聲漏れ聞く戸棚。
九郎兵衛は身も世もあられず。我が子に
寝目をかきよよりはと戸を破るをコリ
ヤコリヤ〜。詞爰を堪へるが男づくの
義理合。この徳兵衛が志を破るのかと。地
聲かけられて出もならず。是非もなき身
の悔泣き。フシ胸に。涙ぞせきのぼす。地
お辰は市松撫でさすり。詞いとしやの不
自由にあらう。他人の私さへ悲しいもの
二親の心はどの様にあらうぞ。徳兵衛殿
了簡付けてたつた一目。イヤその手枷猶
合點がいかぬ。男殺しにさすまい爲女房
と縁切らした。スリヤ義平次とはあかの
他人。他人を殺した九郎兵衛が子までに
難儀がかゝるとは。三ぶ殿此方縁切つた
事申上けずか。申上げた段ではないが。
下司の智慧は跡の悔。義平次を殺したは
六月の十一日の夜。暇の状は七日後。や

つぱり男殺しになつて市松へ手錠。あん
まり見る目がかはいさに。忤を媒鳥にし
て九郎兵衛を尋出しませうとお願ひ申し
て。連れて下つた其心は。いつそ親子三人
連れて筑紫の果へもやる思案。預つて來
た俺が難儀はコレ白髪首一つ。願うた後
生はなししも慈悲。そなたも慈悲どうぞ
逢はしてやつてたも〜。地頼む〜と
親子と俱に餘儀なくいふに徳兵衛は。す
つと立つて幸ひと湯玉の立つ茶びん提
け。詞コレおかち殿三ぶ殿。此内に九郎
兵衛が居ぬといふ證據。見て疑を晴らさ
れよと。地たぎりし沸湯を縁側へざつと
流せば下よりも。あつや〜と逃げ出る
こつば。すかさず駈け寄りそつ首掴み。
詞コレ見られたか三ぶ殿。最前から蟲の
音が止つた故睨み付けて置いた。飛脚に
うせたも此奴である。地引つ擔いて門
柱へ打付んとする所へ。又も飛出るな

まの八。コリヤさせぬはと取付くを汝も
踞んで居つたかと。揉合ふ内にこつばは
遁れ。九郎兵衛が有所は慥に戸棚の内と
呼ばはつて駈け行くを。それははしては
と八を蹴飛ばし。追駈け行けば遣るまじ
と續いて走るなまの八。それ又やらじと
釣船もフシカ。跡を慕うて駈けり行く。
二人の女房はあぶ〜とお辰は猶も夫が
氣遣。おかち様留守頼むと言捨て小棧引
つ掴み。フシ飛ぶが如くに行く跡に。地お
かちはうろ〜あたりを見廻し。人影な
きを幸ひと市松連れて戸棚の戸を。開け
んとすれば錠下りたり。エあんまりな用
心と。戸をこ〜打叩き。詞九郎兵衛
殿まめで居て下んしたの。此子も元より
逢ひたがる。わしも逢うて一通り言譯せ
ねば心が済まぬ。地あたりにもござん
せぬ。戸棚の戸を引放し顔見せて下んせ
と。フシいふも涙のしやくり聲。地戸棚の

内には泣く音を隠し。詞市松よ。汝や父が代りに手がねを打たれ。さぞ腕が抜ける様にあらうな。さういふ難儀がかゝると知つたら何で大坂を立退かうぞ。今では徳兵衛への義理があつて。薄紙一重の戸も破られず。此家で命を捨てる事もならぬ。とゝが顔が見たくば。獄門にかゝつて見るか。繩かゝつて逢ふより外逢ふ事もあるまい。おかち坊主めが手は腫れはせぬか。イエ／＼。ちつとばかり水ぶくれに。かはいや喰ひ入る様にあらう。きつう痛むとはいはぬか。次第に緊つて痛むかして。此中はしく／＼泣いてばかり居ます。ソレ市松父様にちやつと物を言やいと。地戸棚の傍へ押しやれば。詞コレとゝ様かゝ様と一所に内へ戻つて下され。マア顔見せて下されと。地戸棚に縫れど手は叶はず。あせり歎くを二親は内と外との諸涙。堪へ兼ねて思はずも

わつとばかりに泣き叫ぶ。地早廻りくる知らせの刻限こつばが知らせに捕手の人數。表口より所の代官。裏口よりは大鳥佐賀右衛門。捕つた／＼と亂れ入り。詞脇は構はず戸棚を圍ひ。九郎兵衛が在所はこの内。地戸を打ちめけと玄翁掛矢。ナウコレ待つてと駈け寄る女房。家來の大勢手ごめにし情なくも打碎く。二枚戸碎けてはらく／＼とすはやと思へば内は明きがら。詞南無三寶後を切つて逃けたるぞ。地續けや來れと佐賀右衛門。追ひ駆け行けば女房も死なば夫と諸共と。市松連れて跡に付き裏道さして。三重へ駈けり行く。地裏は大藪十重二十重。追つ取り巻きし中にもこつば。なまの八が待ちかけて通れぬ覺悟と捕りかけたなり。九郎兵衛は得手に帆。竹等二人を待兼ねしと左手と右手に引受けて。小枕返しにどつさりどさり。加勢が捕つたと取付くを伺ひ

ろぐと捻上げて。弱腰ほんど命の蹴上げ。其間にかゝる悪者二人。鬪殺しと肩間府先斬られて土手をころ／＼。這上れば切付くる。むしやぶり付けば難作す訴人の褒美に此世の暇。冥土へうせいと兩人を削いだり切つたりはつたり。鬪殺しと止めの刀其間に大勢立ちかゝるを。難き立て／＼切りまくり。ッ藪の内へぞ身を忍ぶ。地かゝる騒ぎの折も折引かれ來る礮之丞。言譯立たず縛り繩後にしを／＼徳兵衛釣船。願ひの採手も聞入れず。詞國へ引いた上の事主計が力に及ばずと。地引立て通るを佐賀右衛門それと見つけて小指出で。詞是は／＼主計殿。お刀の盗人召捕られしは重疊々々。しかし遙々と國方まで引連れらるゝは國土の費。地首にしてお歸りと。ッ日比の意趣を持ちかける。詞イヤまだ盜賊の筋治定致さず。さるによつて召連れると。地いは

せも立てずイヤサそれは手緩しく。盗人たけんしいといつまでも諍ふもの。コリヤ拙者にお任せと地藪陰へ引据ゑさせ。コリヤこんな奴は手ばしかう。森座離して仕舞ふがよいと。地刀するりと抜き振上げ下討つ所を。主計はすかさず其腕捻上げ拔身取り。ソレ礮之丞其し明りに透して。コヒヤこれこそ千手院力王のお刀。扱こそ知れた盜賊めと。地引擔いでめらすれば。徳兵衛釣船踏付け。小うまう手盛をまるつたと。三寸繩に締上げる。地主計はやがて聲張上げ。コリヤ。團七九郎兵衛。藪内にて様子は見るべし。殿のお刀落出したる功に依つて。礮之丞は先知に歸る。さすれば其方が願ひもあるまじ。サア尋常に繩かゝれと。地呼ばはる聲を聞くより九郎兵衛。妻子を引連れ搖ぎ出で。

ア、忝き御差配。もはや浮世に心も残らず。地急いで繩と兩手を廻せばラさもあるん。コリヤ幸ひ繩かける役人地是にありと立寄つて。市松が手がねを放し。コリヤ徳兵衛。忝は女房に付け離縁致したと申上げて。日限の相違にてお上の疑ひ晴れず。申譯の爲母が代りに。市松に繩かけさせよ。コリヤ。ヤイ但しは竹鋸を持たするか。地是非なき仰に目顔をし。かめ。コリヤ市松父に繩かけてお目にかけい。ほんの是が親子の別れと。地涙ながらに捕縄持たせばおかちはわつと泣くばかり。市松はうろくと。コリヤおやそんな事いやく。父様と連立つて早う去にたい母様と。地絶り歎けばしやくり上げ。コリヤそれが叶ふ程ならば私に如才があらかいのと。地親子の歎き九郎兵衛が身にしみ渡り人々も。コリヤ堪へ兼ねた

無理に市松引立てて。繩を手繰つて後より兩手を持添へ。コリヤ九郎兵衛。これが親子の因果の瀬戸。かすり疵でも負せる程に働くが縁切つた印。此方に遠慮はない。地サアこいやつと捕りかけたり。コリヤ、これも過去の約束事。廻る報は親子の絆。切つた印を見よと。地拔身を振上げ見交はす顔。父様怖い伯父様爰をばなしして。身を揉みあせるは修羅道の苦患もかくやとあさましし。地隙間を見て無理やりにしがみ付かせば九郎兵衛も。程よくどつかと大地に仆れ。抑へて繩をかけるも涙わつと取付く女房を。押退け突退け介松主計。コリヤ佐賀右衛門と諸共に國へ引いての采配と。地引立てさせ天の網かゝりや繋がる礮之丞。我が身にかへて命乞追付けめでたき吉左右と。情も深き備中の。玉嶋にて徳兵衛が團七九郎兵衛捕つたりしと。言傳へしは義理

の繩。情の繩と怨の繩。皆引連れて和泉
の國濱田の。館へ立歸る

延享第二孟秋十六日

作者

並木千柳
竹田小出雲
三好松洛

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鍼弟子如糠因吾儕所傳派先
師之源幸甚

竹本義太夫高弟

予以著述之原本校合一過可爲正本者也

竹田出雲掾清定

京二條通寺町西へ入丁

正本屋

山本九兵衛版

大坂高麗橋二丁目出店

山本九右衛門版